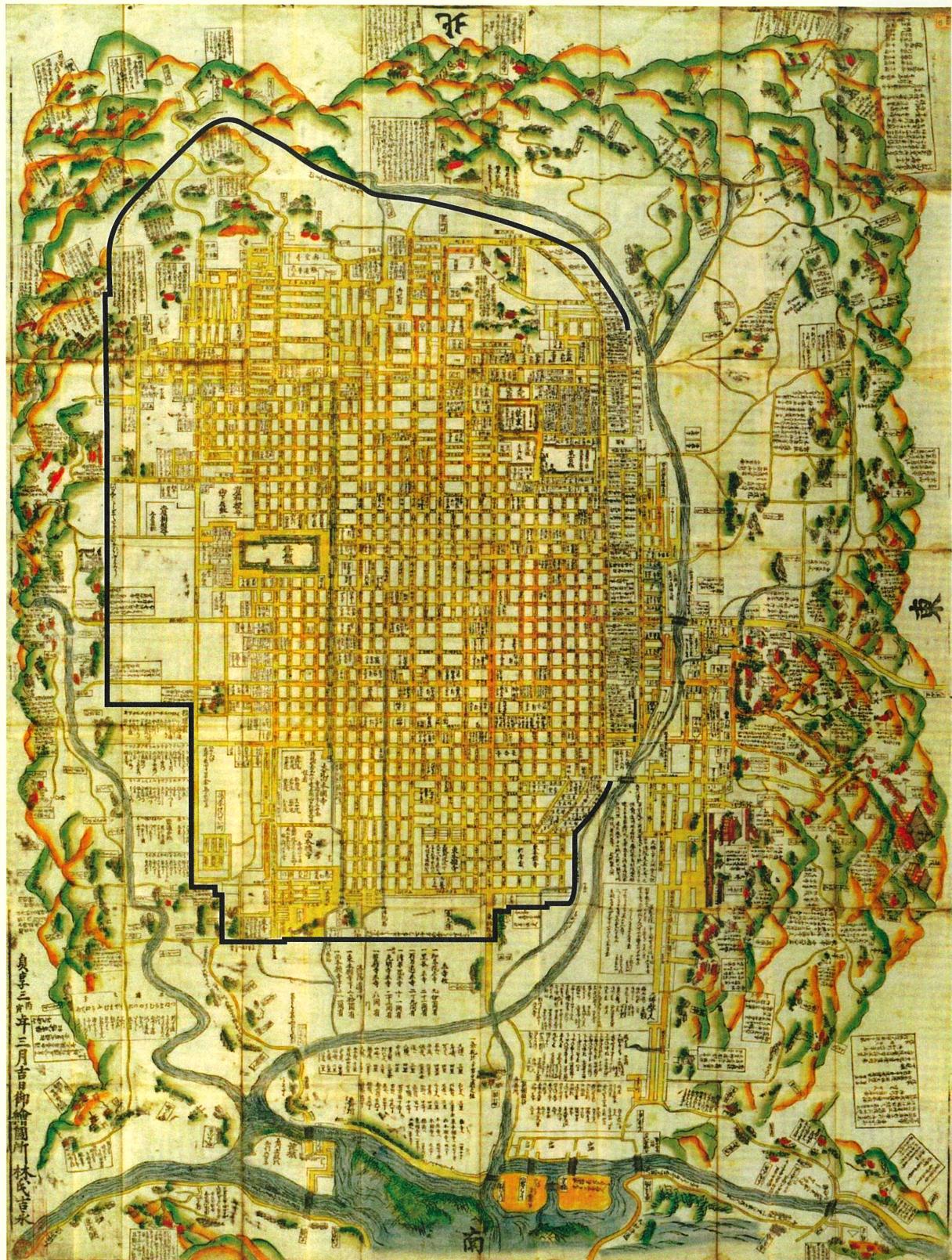


# 石碑を巡る京都医史跡散歩

-京都医学史とその史跡-

廣瀬源二郎



京大絵図 林氏吉永出版、貞永三年（1686年）刊（国立国会図書館蔵）

御土居（境界線太線化）：豊臣秀吉が築造した土塁と堀の跡（約 22.5 km）で、この内側が洛中、京都の中心部である。

# 石碑を巡る京都医史跡散歩 —京都医学史とその史跡—

(1)

廣瀬 源二郎

## はじめに

アリストテレスは『形而上学』の序論で「全ての人間は生まれながらに知る事を欲する」と書いている。人間は誰しも「ものを知りたい」という本性を持っているのであろうか。誰もが老い先が見えるようになると、来し方行く末を考えて自分に關係のある事象の歴史に興味を持つらしい。これは高齢になり今までの記憶が薄れたため、忘れやすいものを問いただして確かめることと關係があるのであるのではと思っている。

ここ数年京都と金沢の自宅を行ったり来たりするようになり、医学生の頃歩き回った京都の地の医史学に興味が湧いてきて京都の医史跡を散策しようと考えた。知力・体力・気力の衰える老体には最も必要な体力運動にもなるし、知的好奇心を感じ満たすことで記憶も確かとなり知力・気力も維持できるというものである。

さて京都の医学は奈良から平

安京への遷都 794 年以来、いかなる推移を取ったのであろうか。奈良時代の医学は唐の高僧鑑真和尚が 743 年以来 6 度目の日本への渡海が叶い 753 年薩摩に上陸してやっと奈良に辿り着き、平城京にて広く宗教（律宗・天台宗）のみならず医薬、特に本草学の知識をも大和人に教えたものがその基盤となったとされている。恐らく平安遷都と共に鑑真和尚の医療が京都にも伝えられたと考えられ、日本の医学の中心であったと考えるのが妥当であろう。また平安遷都後奈良興福寺から施薬院が室町小路九条三坊十町近くに移され、施薬院用薬草園が山城の国乙訓郡に設けられたと『日本後紀』にあることから、2014 年には京都市埋蔵文化財研究所が発掘調査を行い、現在の京都市南区東九条上殿田町で遺構が見つかり、施薬院の木簡が 16 点出土したニュースが新聞紙上をにぎわした。

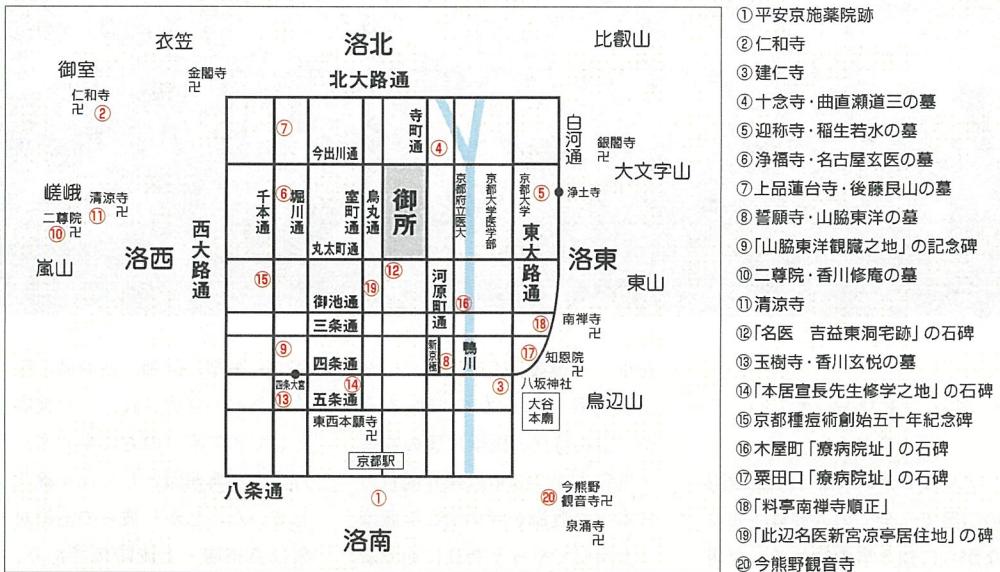
また律令制度の中で宮内省内に設けられた典薬寮が医療制度の基本を司ることになり、平安

京でも医師、針師、按摩師、呪禁師などが育成され、その代表として和氣家（のちに半井家）、丹波家が典薬頭として代々継代していた。しかし彼らの治療対象は富裕層・上流階級であり、公の要請の場合のみ一般大衆に医療を届けていたとされる。

古くからの資料蓄積のある京都府医師会では 1975 年 4 月第 19 回日本医学会総会を記念して「京都の医学史展」を開催し、その時の資料のまとめとして京都府医師会医学史編纂室および京都医学史研究会の諸氏の熱意により 1980 年に思文閣出版から大冊の『京都の医学史』全二冊（本文篇、資料篇）を発刊、本文篇は 1500 頁に及ぶ完璧なまでの京都医学史である<sup>1)</sup>。資料篇にある「京都の医事年表」によれば、860 年（貞觀 2）嵯峨院（今の大覺寺）が建立され、寺内に一般治療のための濟治院とらい病治療のための不壌化身院が設けられたとある。これが京都での医療施設の滥觴であろう。

平安京での医療に関する情報はあまりないが、遷都以来京都

図1 京都市街略図と史跡の位置



では大雨による鴨川の洪水、長引く応仁の乱、市街地での大火、疫病である疱瘡、水痘、らい病の流行などが歴史的に知られており、医療の役目を果たすべき社会的背景は大いにあったと考えられる。しかしこれらの歴史的痕跡は朽ち果て、長い時を経た都市化のため先ず残っておらずその遺跡を見ることはできないことから、実際にその史跡を京都で訪ねてその思い出を探ることのできるのは室町時代以降の安土桃山時代1500年以降ということになろう。これらの史料となる石碑・墓石碑でさえ、数百年の時代を経ているわけで、いつの間にか消失したり、やもなく移転されたりしているわけである。これらの再発見、記念碑・墓石の再建立には多くの医学史研究者のたゆまぬ献身的な

努力があり、平安時代から江戸時代までの医学の中心地であった京都には未だに医史跡となる墓石碑が多く見られる。これらの場所を散策してわれわれの先達を思い浮かべ、われわれの記憶を編みなおすのは楽しいことである。

幸いにも京都の医学史や医史跡についての著作には、既に立派な力作があり、前述の京都府医師会編『京都の医学史』に加え、1984年京都市桂の開業医で医史学に造詣の深い杉立義一氏の『京の医史跡探訪』初版本、1991年同誌増補版が京都の思文閣出版から発刊されている<sup>2)</sup>。両書共沢山の資料を集め完璧なまでに推敲された内容のある良書である。杉立氏の探訪記は多忙な診療の合間に医療関係の社寺や旧跡を探訪され編み出され

た貴重な著作であり、私の今回の著作はこの両書を大いに参考にさせて頂き、また多く引用させて頂いており、ここに前もっておことわりをする次第である。

京都市での散策に便利な知識として、市内での通りの名前を覚えることである。ご承知のように、京都市街は東西南北に直交する大路・小路で碁盤目状に仕切られており、殆どの通りが固有の名前で呼ばれ、京都市街案内図は何何通上ル、下ルが南北方向表示（送り仮名はカタカナでルと記す）、東入、西入が東西方向表示である（送り仮名ルを入れない）。現在の洛中東西通りの北端は昔の一条通からさらに北側に新設され、今出川通、北大路通、北山通、南端は十条通であり、東端南北通りは東大路（東山）通、西端南北通りは西大路通で

あり、市街の通りの名前を覚えるとこれらの表示は極めて便利であることから、昔から通りの名前を覚える歌がある。学生時代を京都で過ごした私には大変有用であり、京都市街散策・探索をされたい方にも役立つと考え、東西通と南北通の歌があるがここでは使うことの多い東西通の歌を地図と比べて紹介する。ただし古くに作られた歌であり通りの名前は旧市街洛中に限られ、東西通の歌の始まりは御所南の東西通丸太町通から始まり、終わりは十条、東寺となっているが、京都市民でも歌い慣れているのは五条通までであり、これは歌詞が作られた江戸時代に町家があった居住地に相当するからであろう。

### 【東西の通り名の歌】

歌名は「丸竹夷」(民謡)と呼ばれる。

丸竹夷二押御池

(まるたけえびすにおしおいけ)

姉三六角蛸錦

(あねさんろっかくたこにしき)

四綾仏高松万五条

(しあやぶったかまつまんごじょう)

ここまででは京都人なら誰でもシッテハルでしょう。さらに下ると

雪駄ちやらちやら魚の棚

(せったちやらちやらうおのたな)

六条三哲通り過ぎ

(ろくじょうさんてつとおりすぎ)

七条こえれば八九条

(ひっちょうどこえればはちくじょう)

十条東寺でとどめさす

(じゅうじょうとうじでとどめさす)

### 【南北の通り名の歌】

「寺御幸」(童歌)と呼ばれ、それほど歌われなかつたため一度は途絶えたが過去の史料から再編されたものである。その大部分は通り名を並べただけである。

寺・御幸・麁屋・富・柳・堺

(てらごこふやとみやなぎさかい)

高・間・東・車屋町

(たかあいひがしくるまやちょう)

鳥・両替・室・衣

(からすりょうがえむろころも)

新町・釜座・西・小川

(しんまちかまんざにしおがわ)

油・醒ヶ井で・堀川の水

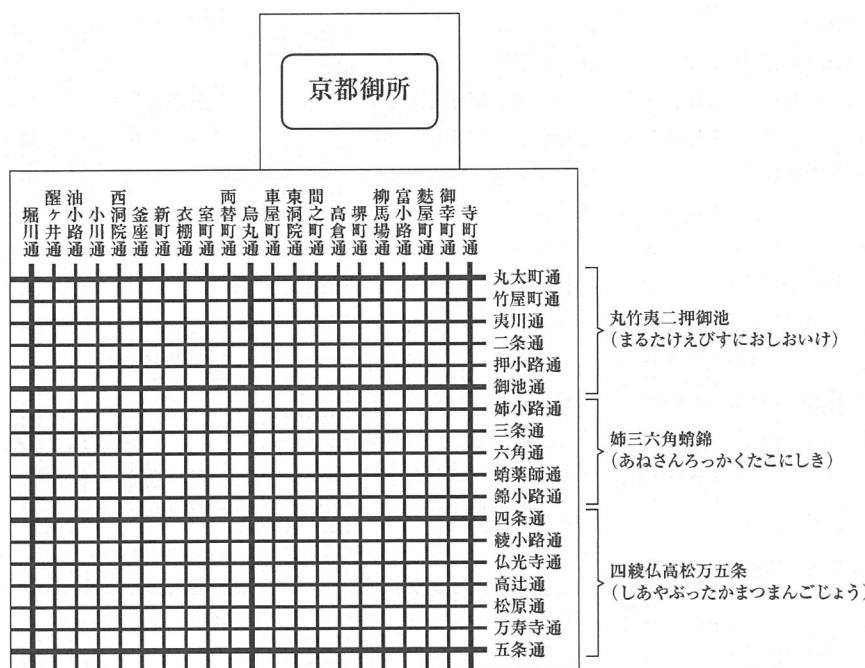
(あぶらさめないでほりかわのみず)

葭屋・猪・黒・大宮へ

(よしやいのくろおおみやへ)

松・日暮に・智恵光院

(まつひぐらしにちえこういん)



淨福・千本・果ては西陣  
(じょうふくせんほんはてはにしじん)  
これらを参考にして京都の医史跡へ暇を見つけて何度も足を運んでみよう。さらに京都の通り歩きで古い京都の街並の歴史を知りたい方、美味を楽しみたい方には、京都で生まれ育った歯科医でエッセイストでもある柏井壽氏の著作『京都の通りを歩いてゆる(通)が愛する美味・路地・古刹まで』<sup>3)</sup> (PHP新書) をガイドとして携帯されて東西の通りの散策をお勧めしたい。

## 一、平安時代の医学・医療

桓武天皇が794年都を平安京へ移し、以降源頼朝が鎌倉幕府を開く1185年までの約390年が平安時代である。

奈良時代に律令制度が設けられ、この制度が維持されたわけで、「京都の医学史」資料篇の「京都の医事年表」によれば、839年に厚生省に当たる典薬寮が東臈院の地二丁に設置維持され薬園となったとあり、また嵯峨院建立に際し一般医療のための済治院とらい病治療のための不壌化身院が設けられたとあるのは前にも述べた。恐らくこれが平安京最初の診療所・病院組織での医療の始まりであろう。

### ◎平安京施薬院跡

2014年1月から3月まで、京都市埋蔵文化財研究所は京都市

南区東九条上殿田町 (JR京都駅南口を出て200mほど下る) で発掘調査を行い、貧しい人や病人を救済した施薬院（昔の読み方は“やくいん”で“せ”を読まなかつた）の木簡と考えられる16点が出土した<sup>4)</sup>。この地は当時の平安京左京九条三坊十町跡に相当する場所で、鎌倉時代以降は九条家領地となつたが、それ以前は「施薬院御倉」が置かれていた。施薬院自体はこよりわずかに南西の九条三坊三町に所在していたとされる。ただしこの近辺には現在何の跡も碑も残っていない（図1の①）。

医学としては、和氣清麻呂の長男和氣広世が内外經書数千巻を藏していたとされ、また彼が『薬經太素』なる医学書を編んだとする人もあり、その内容は散逸し原本は伝わらないとされるが、小曾戸洋氏によれば実はかかる医学書は偽書であり存在しなかつたのが正しいという<sup>5)</sup>。

原本の形を今に伝える日本最古の医書とされるのは、典薬頭丹波康頼 (912~995) の著した『醫心方』である。本書は丹波家（中国後漢の靈帝子孫）の祖であり針博士であった丹波康頼が隋唐以前および以降の二百余の文献をもとに984年に編纂し、ときの円融天皇に全三十巻を献上了した。医の倫理・心得、広い分野の治療薬としてのわが国での薬草学、鍼灸、保健衛生や食品（五肉）栄養学などについて漢文で書かれている。この貴重な医学

書三十巻のうち五巻（仁和寺本）の国宝が京都御室にある仁和寺靈宝館に、他の貴重な国宝古医書三編『黃帝内經太素』、『黃帝内經明堂』、『新修本草』と共に所蔵されており、毎年春秋の2回名宝展として一般公開され拝観できるチャンスはあるが、仁和寺本来の宗教と関係のないことから、期間中に数日間だけ非定期的に展示されるようでは私の2~3年にわたる試みも不成功で拝観は極めて困難である。同じ『醫心方』半井家本は国により買い上げられ発刊千年後に国宝として東京国立博物館に所蔵されている。因みに国宝の医薬書は五書あり、四書は仁和寺、半井家本のみが東京国立博物館にある。

### ◎国宝『醫心方』所蔵仁和寺

御室仁和寺（図1の②）は桜の名所でもあり、秋には素晴らしい紅葉も見られる絶好の観光地である。京都の北のはずれで遠いが、暇ができたらのんびりと訪ねたい場所である。市バスで京都駅から約40分（26番バス）、京阪三条からも40分（10番か59番）、京福電鉄嵐電で御室仁和寺駅下車徒歩3分。

## 二、鎌倉時代の医学・医療

1192年源頼朝が征夷大将軍に任じられ鎌倉に幕府を開き武家政権が始まり、北条氏滅亡（1333年）までの約150年が鎌倉時代

である。

京都での出来事としては鎌倉時代の初期 1202 年将軍源頼家が寺域を寄進し栄西禅師を開山として宋の百丈山を模して祇園町南に建仁寺が建立された。創建時は真言・止觀の二院を構え天台・密教・禪の三宗兼学の道場として当時の比叡山延暦寺の強力な勢力に対応していたが後に、栄西禅師はわが国の禪宗臨済宗の開祖となった。宋に渡り宋時代の宗教(禪)、医学(医方)、茶道を 1191 年(51 歳)持ち帰り多くの僧医を育成したとされる。帰国時茶の苗木を持ち帰り、茶を栽培して茶の有用性を説き 1211 年『喫茶養生記』を著し鎌倉時代の代表的医書となっている。養生の基本は五臓六腑が調和を保つことであるとして、睡魔を予防し疲労は茶を飲むことで回復し、苦みのある茶を飲むことで心臓が強くなり長寿の妙薬であると茶の効能を宣伝し、現代的解釈では茶を飲み、座禅で平静の心を保てば長寿となるとした。この書を後鳥羽上皇に献上しているが、これらが京都の地でどれほど普及して役立ったかは定かでない。活動的で鎌倉、京都、九州を精力的に回り禪宗で座禅による臍下丹田の気を身体各部に行き渡らせる効用を布教し、京都に帰り往生したとされ、その御靈は建仁寺開山堂に祀られている。

祇園甲部花見小路下ルの先で歌舞練場を過ぎると眼前に建仁

寺北門がある(図 1 の③)。嘗ては塔頭 60 余といわれ広大な領地を持っていたが、國からの命で所有地を減らされたとはいえ今も 14 寺院を持つ臨済宗大本山である。本坊には俵屋宗達による国宝「風神雷神図」(現在はデジタル複製画、本物は京都国立博物館蔵)、法堂の百八畳に及ぶ大天井には 2002 年小泉淳氏が 2 年の歳月をかけて描いた水墨画「双龍図」を観ることができ写真撮影も可能である。祇園周辺の喧騒が嘘のような静寂さを楽しめる観光の穴場であり、一度は立ち寄ってみるべき大きな寺院である。

鎌倉時代の 14 世紀の後半 57 年間は南北朝時代(1336 ~ 1392)と呼ばれ、龜山・後宇多天皇を擁する大覚寺統は南朝方と呼ばれ、足利尊氏が支援する後深草・伏見天皇を擁する持明院統の北朝方と分裂して戦った。2 年後の 1338 年に足利尊氏が征夷大將軍となり、足利義満が室町に幕府を移し 1392 年に南北朝が統一されて以降室町時代となる。この間の 1368 年には中国では元が滅び、明国が建国されている。杉立義一氏によればこの乱れた戦国時代にも典薬寮制度はあったとされるが、地方における医師制度は崩壊して、代わって僧医が医療面を担当した時代であった<sup>2)</sup>。

京都の街では疫病疱瘡の流行、大火や全国の飢饉の広がりで、1420 年前後には洛中は死体

の海であり山のように積むこと幾千万であったという。

#### 参考文献

- 1) 京都府医師会編『京都の医学史』全二冊：本文篇・資料篇、思文閣出版、京都、1980
- 2) 杉立義一『京の歴史跡探訪』初版、思文閣出版、京都、1984(1991 年増補版出版)
- 3) 柏井壽『京都の通りを歩いて愉しむ(通)が愛する美味・路地・古刹まで』PHP 新書、PHP 研究所、2019
- 4) 小檜山一良『施薬院の木簡』リーフレット京都、No.311(2014 年 12 月)発掘ニュース 111、京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館  
<http://www.kyoto-arc.or.jp>
- 5) 小曾戸洋『古代日本医家伝糾誤三題』日本醫史學雑誌、1987;33(3) 74-86

廣瀬源二郎(ひろせ げんじろう)  
現職：医療法人社団浅ノ川 浅ノ川総合病院常勤顧問、脳神経センター長、てんかんセンター長  
昭和 41 年 京都府立医科大学卒  
同 年 米国空軍病院(立川) 内科イン턴  
昭和 42 年 同上 内科レジデント  
昭和 43 年 ヴージニア大学医学部神経学レジデント  
昭和 45 年 同上 チーフレジデント  
昭和 46 年 ハーバード大学医学部神経学フェロー(Harvard Longwood Neurology Program Fellow)  
昭和 48 年 金沢医科大学内科学講師(神経内科主任)  
昭和 49 年 同上 助教授(神経内科主任)  
昭和 61 年 金沢医科大学神経内科学教授  
平成 5 年 米国神経学会フェロー(FANA)  
平成 17 年 金沢医科大学定年退職、名誉教授  
同 年 医療法人社団浅ノ川 浅ノ川総合病院常勤顧問  
平成 30 年 秋季叙勲、瑞宝小綬章受章  
令和 5 年 現在に至る



# 石碑を巡る京都医史跡散歩 —京都医学史とその史跡—

(2)

廣瀬 源二郎

## 三、室町時代・安土桃山時代の医学・医療

14世紀頃から16世紀頃までの室町時代の背景は、京都に幕府の本拠が置かれ朝廷である公家政権はその実権を失った。前期の室町幕府第三代將軍足利義満は守護大名の勢力を統率して権力を確立し、室町に花の御所を造営し太政大臣となり1397年北山に金閣寺を建立し、京都での文化・芸術と共に学問をも奨励した。さらに八代足利義政は1489年には東山に銀閣寺を造営している。明国との交流も始まり文化、宗教（臨済宗）などが流入して、職人文化の中に医師が市井に出現することになった。この背景で登場したのが明国留学から帰った田代三喜（1465～1544）の李朱医学を関東古河の地で十分に学び1545年に帰洛した京都育ちの医師曲直瀬道三（1507～1594）である。4年後の1549年にはザヴィエルが来日しており、イエズス会の宣教も始まり、数年後には豊後の国で

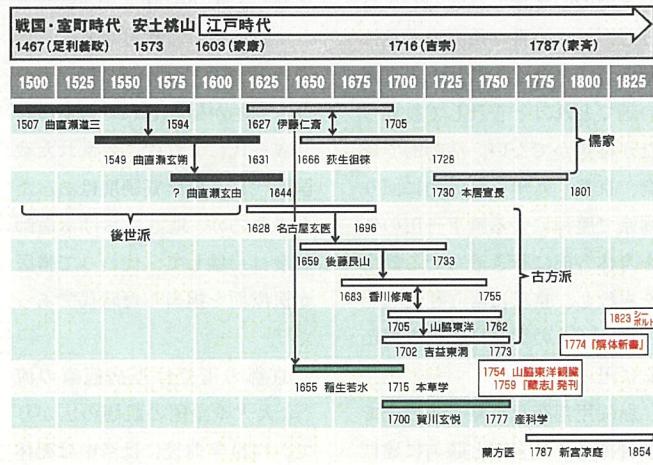
は大友宗麟らの支援を得たポルトガル人アルメイダの西洋医術が伝来していた。1565年にはキリストが京都にも入り医学知識のあるアルメイダと神父ルイス・フロイスが上洛していたという。彼らのキリスト教精神が曲直瀬道三の医の基本にも影響を及ぼしたことは彼の項で触れる。16世紀後半織田信長が足利義昭を奉じて上洛した1568年から1600年関ヶ原の戦い、さらに1603年江戸幕府開幕までが安土桃山時代であろう。織田信長・豊臣秀吉によるいわゆる天下統

一の時代である。この時代にポルトガル渡來の西洋医学が京都で広まった歴史はないようである。

### ◎医家曲直瀬道三

市バスを河原町通今出川で下車して、河原町をやや北上（京都では上ルという）して今出川通に出て右に賀茂大橋、右大文字山を見たら、左折して西に向かい約100mで大きな通り寺町通に到着する。そこで寺町通上ルで北上すること約半kmで右側（東）に上京区寺町通今出川上ル

登場医家たちの生存歴と師弟関係など



鶴山町13を住所とする曲直瀬道三墓所・十念寺がある。大きな寺の門標と曲直瀬道三墓所なる新しい石碑があることすぐに分かる。ここが日本の医学中興の祖で「医聖」と称された曲直瀬道三の墓所である。山門をくぐるとすぐ正面右手に横2m余高さ1mの大きな鞍馬石からなる石碑が横たわり、初代曲直瀬道三顕彰碑とある。その裏面には1990年日本東洋医学会、日本医史学会と東亜医学協会の共催で建立された新しい顕彰説明文のある重厚な碑である。さらに進んで無縁仏群を右手に見て墓地の奥に入ると東北寄りに高さ1mの風化した墓石がひっそりと立つのが道三の墓である。ここでは墓石を見つけることが難しいので寺の方に案内していたのが賢明である。大きく立派な顕彰碑に比べ、あまりにもささやかな墓石であり、また墓名も判読が難しいほど朽ちている。墓碑面にわずかに「一溪道三居士 文禄三年正月四日」とあり、彼の名声にしては意外と思える墓碑である。この墓所の他に立派な曲直瀬道三供養墓が「一溪先生之墓」と銘されて金閣寺北の京都市北区大宮玄琢北東町住宅地にある整然とした野間玄琢廟所内に野間玄琢(1590~1645)により建立されている。

曲直瀬道三は京都柳原生まれで、本名堀部正盛、字は一溪。時代的に室町から安土桃山時代にかけての京都で最も古い高名



十念寺（曲直瀬道三墓所）



曲直瀬道三（武田科学振興財団 杏雨書屋所蔵）



曲直瀬道三の墓（十念寺内）



曲直瀬道三の墓（野間玄琢廟所内）

な漢方医家である。生後間もなく両親に死別し、8歳(1514年)で滋賀県(江州)守山大光寺に遊学して儒教を習い13歳には京都に戻り仏教を学ぶため相国寺に弟子入り喝食(僧見習い童)となった。その後思うところあり22歳で関東足利学校に入り漢学を学び、さらに当時中国明代(1368年明建国)に渡明し最新の漢方医学である金元医学を12年間学び帰国した先達田代三喜が近在の下総古河にて金元時代の李朱医学<sup>（ローモド）</sup>をいち早く取り入れて医家として活躍していることを知り無理に弟子入りして、宗教色を排し加持

祈祷に頼らず、病気原因を明らかにして治療する漢方に鍼灸を加えた医療を13年間にわたり学んだ<sup>6)</sup>。師田代三喜は79歳で亡くなり3年の足利学校、13年の三喜の指導を受けた一溪は京都に戻り、一般大衆への医療を広めようと考えた。39歳(1545年)に帰洛還俗して室町時代に長く続いた応仁の乱、京都の大火で荒廃した京都にて医業に専念した。高潔な師田代三喜の医道精神を貫くために彼の異名を借り、導道鍊師の「道」と三喜の「三」から自身を道三と以降名乗ることにした。田代三喜から直接口伝で学んだ日本の薬草学経

験から旧来の李朱医学を基盤に実証的手法を取り入れた万人のための独自の道三流の漢方医学「後世派」<sup>①</sup>を完成させた。当時病を得ても医療を受けることが難しい大衆に身分に関わらず彼は医術を広く施すようになり急激に名声を得て、その噂は高家にも届き1557年に即位した正親町天皇を診察して信任を得て以来、二代目道三に至るまで長く皇室に出入りするようになった。

曲直瀬道三の伝記については服部忠弘氏の小説『医の旅路はるか曲直瀬道三とその師田代三喜篇』<sup>6)</sup>、山崎光夫氏の『小説曲直瀬道三 亂世を医やす人』<sup>7)</sup>がある。

**一口メモ①** 李朱医学とは漢方医学の一派で、中国12世紀から14世紀にわたる金および元時代に新しい医学の流れとして登場し李杲と朱震亨により生み出された体内環境異常を病因とする病気を温厚な漢方薬で治療する医学をいう。この医学を田代三喜が明に留学して僧医月湖から学び、田代に師事した曲直瀬道三が京都で広めたとされる。

**一口メモ②** 後世派（後方派とも呼ばれる）とは明時代に留学して医学を学んだ田代三喜を始祖として、その教えを個人的に学んだ曲直瀬道三とその一門により継承された漢方医学一派をいう。陰陽五行説を取り入れ、薬物を五つの薬性（寒・涼・熱・温・平）に区別、さらに五つの

味を割り当て、身体を五臓五腑などに分類し、生命活動のバランスは五行説で分類された各要素間の相生相克関係により維持されるとする理論中心の漢方学派である。（日本薬学会薬学用語解説から一部改変引用）

道三は時の將軍足利義輝に召し出され侍医となり、安土桃山時代には織田信長上洛時に彼を診察し、その礼として法眼の位<sup>一口メモ③</sup>をもらい、さらに伽羅の名香木「蘭奢待」の一片を下賜されたのは有名な逸話である。また豊臣秀吉に仕え島津討伐や備前にも同行しており、毛利元就、三好長慶など戦国大名をも診察して医療を担当した。さらに多くの医家養成のため医学塾「啓迪院」を御所の西（杉立義一氏によれば現在の上京区新町通上長者町下ル辺り<sup>2)</sup>）に興し、全国から数百の門人を集めたとされ、武田科学振興財団杏雨書屋所蔵の『曲直瀬家門人帳』には266人が掲載されているという。また彼らのための教科書ともい

える『啓迪集』八巻（京都大学貴重資料デジタルアーカイブ）を1574年に発刊し、他にも多数の医家向け著作（三十六書、三木栄氏調査）を残した。

その中の『道三先生切紙』なる書は医塾啓迪院での講義メモで弟子たちに渡したもののが後に編集され発刊されている。この冒頭にはヒボクラテスの誓いと同じく医の心得なるもの五十七箇条を挙げ、そのトップに「慈仁」を挙げているのは現今医学教育倫理面を史的考察する上で極めて重要な記載であろう。彼の医療そのものは一つの学説にとらわれず証拠があれば広く治療法を受け入れる姿勢で流派をなし、一世を風靡して全国に広め医家最高位である法印に叙せられたが1594年（文禄3）88歳で死亡し、京都十念寺に葬られた。

道三は医の倫理面でキリスト教の倫理的考え方ひどく共鳴しており、1584年にキリスト教の洗礼を受け、「ベルショール」なるクリスチャン名をもらい改



『啓迪集』（京都大学附属図書館所蔵）



『道三先生切紙』五十七箇条（京都大学附属図書館所蔵）

**一口メモ③** 宗したとポルトガル宣教師ルイス・フロイス著『日本史』に記載があるが、他に史料がなく、1587年には秀吉がバテレン追放令を出しており、フロイス自身も畿内を去り長崎に帰ったことから、当時の道三・秀吉の関係を考えると理解し難い。

**一口メモ④** 法眼、法印は元来僧の位を表すものであり、最上位が法印、次いで法眼、その下が法橋である。中世以降この位付けが医師にも適用されるようになった。

**一口メモ⑤** 守屋正氏の1982年の日本医史学会での会長講演<sup>8)</sup>で、フロイスの『日本史』第59章において「日本のもっとも優れた学者の一人で重立った医師である都の住人（曲直瀬）道三の改宗について」との詳細な記述があることから入信したことは真実であろうと述べている。ただ彼は死後京都市の浄土宗西山光明寺派十念寺に法名宝智院と諡號永順として葬られており、キリスト教徒に成り切っていたとは到底考えられない。

学祖道三の死後、啓迪院は養子（妹の息子）である玄朔（1549～1631）が1581年既に二代目道三を継いでおり、そのまま院の長を継承した。二代目道三である玄朔も養父に劣らぬ医術を惜しみなく患者に施し名声を受けて活躍し、1586年には法印に叙せられ、朝鮮出兵にも同行し、



『医学天正記』乾巻  
(京都大学附属図書館所蔵)

『医学天正記』坤巻 玄朔自身の診療録  
(京都大学附属図書館所蔵)



秀次切腹に伴い常陸国に流されるとその後赦免された。徳川時代に入り徳川秀忠の病を治してその功績から城内に邸宅を賜り将軍家奥医師となり、京都と江戸の隔年暮らしを充実させた典型的京医（東下り医）となった。彼の死後啓迪院は玄鑑、玄鎮により引き継がれるも1639年玄鎮32歳で死亡すると共にその歴史を閉じている。

玄朔も多くの著作を残しており、その中の『医学天正記』<sup>9)</sup>二巻では自身28歳から30年間の診療記録を整理して中風の他60部門に分類して、患者名、年齢、診療月日を日記風に記載した貴重な文献である。この天正記には多くの異本があるとされるが、京都大学附属図書館には富士川游氏寄贈本（富士川文庫）がありインターネットで閲覧できる。その目録の一番目には神經疾患である中風が取り上げられている。患者も天皇、親王から公家、武家、僧、商人や庶民からも取り上げられている。（京都大学貴重資料デジタルアーカイブ）

**一口メモ⑥** 二代目道三（玄朔）

は信長・秀吉時代から家康に至る戦国大名の権力闘争の流れの中で、歴史に翻弄されることなく権力者の要請にも応えつつ自己の意図する医療を多くの患者に施し、その間に体験した患者診療録を『医学天正記』として詳細に書き留め残している。しかしこれには10種類を超える異本があるという<sup>9)</sup>。誰でもが自由に利用できる京都大学貴重資料デジタルアーカイブ（富士川文庫）によれば、乾巻の内容は目次60疾患項目に始まり天正11年正月2日正親町院の中風9例の記載、天正17年4月の八條殿の傷寒、その他の多くの疾患に加え、坤巻の最後に二條又右衛門子息5歳の麻疹に終わる合計60項目の部門・症候群についての記載は現時点でも臨床医師としての能力が抜きん出た医家であったといえる。自身48歳時に肺炎を患って種々の加療を行ったことを肺癰部に記載しており大変興味深く、漢文で書かれた本書ではあるが医師の先生方には是非閲覧されることをお勧めする。

道三の医術の特徴は脈診とされ、脈を診るという実証的手法こそが病気を反映し最も重要と考えていた。これに医療としては中国から漢方医学を取り入れ追従しただけの医学に田代三喜の流れを汲み彼なりの日本化を行い、一つの学説にこだわらず広く手法を取り入れる儒教的精神を加味し幕末まではわが国医学の主流（漢方医学後世派）となり「医聖」と呼ばれていたわけである。因みに道三の『診脈口傳集』1577年（天正5）刊行が残されている（故阿知波五郎氏蔵）。彼の医師としての倫理的姿勢は現在においてもすばらしいものがあり、『啓迪集』の冒頭に80項目の医家に対する注意事項を印し、その中で「医師はまず医術・医法を熟知し、その上で個々の患者を診断し病気の原因を明らかにして適切な治療を施すこと」としたためている。儒教的精神のもとにキリスト教の愛を基調とした医の心を持った医聖であったといえよう。

#### 四、江戸時代前期の医学・医療

この時代の京都医学は啓迪院で学んだ医聖曲直瀬道三門下（後世派）である曲直瀬正純、正円により継代されて行われた。京都には優れた医家が多く、ここで学び、医療を市民に施して名声を得ることで諸国に招かれて特に江戸幕府に招かれる医家

は名誉とされた。彼らの殆どが儒学と漢方学（本草学）を習得してこれを各地で広めることで貢献したとされる。道三の二代目玄朔も1608年に徳川秀忠に召され江戸で大成功を得た一人であるが、彼は1631年江戸にて死亡しており、彼の墓は東京都渋谷区広尾の祥雲寺にある。

##### いのう ◎稻生若水

私の学生時代と米国留学から帰り金沢医科大学に赴任するまでの10年近くを過ごしたのが京都市左京区淨土寺であり、慣れ親しんだいわゆる銀閣寺界隈である。時間があれば散歩するのは銀閣寺・法然院を経て若王子まで続く東山に沿った琵琶湖疎水べり「哲学の道」や吉田山に加え真如堂であった。真如堂界隈には幾つかの寺があり、その一つに通称「萩の寺」として有名な迎称寺があることは以前から知っていた。金沢医科大学に勤めるようになり、金沢の文化を知り、前田家についての知識がつくと名君であった前田家五代藩主前田綱紀は藩政に加え学術・文化面でも業績を残し、特に本草学に興味を持ち京都の地で活躍する儒医稻生若水（1655～1715）を召し抱え、明代本草学の書『本草綱目』ではなく、本邦独自の本草学書『庶物類纂』を編むことを企画した若水を支援した。そのため彼は京都と金沢を1年ごとに移り住む隔年詰め生活を強いられており、私も



稻生若水（『医家先哲肖像集』藤浪剛一編／国立国会図書館デジタルコレクションより）



稻生若水の墓（迎称寺）

昨今金沢の自宅と京都の自宅を行ったり来たりしている生活をしており、同じような生活様式をした彼に親近感を持ちいろいろ調べることにした。

若水は江戸中期の医学者・本草学者・儒学者である。父親は淀藩の御殿医稻生恒軒、本名は稻生宣義、字は彰信、号は若水で医学は父から、本草学は福山徳潤、そして儒学は伊藤仁斎から学んだ。元禄時代には彼の学識は広く認められるようになり加賀藩主前田綱紀も彼の名声を知り、若水38歳（1693年）の時に彼を召し抱えた。彼は「物類考」の編纂を願い出て許され当時の本草学バイブルである明の李時珍著『本草綱目』を補う独

自の博物書『庶物類纂』千巻の編集を任せられた。多くの典籍のある京都で研究して174種の著作から動植物学関係事項を広く集め、特に『本草綱目』にある物産1892種のうち、1200種は本邦に存することを確認したという。1697年に書き始め、三百六十二巻を書き上げた。これらを狭義の『庶物類纂』と呼び、彼の遺志を継いだ弟子丹羽正伯が1738年に完成した残りの六百三十八巻を『庶物類纂後編』と呼ぶ。さらに丹羽正伯が徳川吉宗に命じられて編んだ五十四巻『庶物類纂増補』および『庶物類纂図翼』がある。後者の植物図絵は幕臣戸田祐之<sup>すけゆき</sup>が描いた薬草写生集であり非常に美しく描かれており、国立公文書館デジタルアーカイブ保存の二十八巻がインターネットで参照できる。

杉立義一氏によれば若水は三百六十二巻を書いた時点（1715年）で、京都下京区北小路の自宅で死亡したという<sup>2)</sup>。彼に関する記載の多くに京都北大路で死亡とあるが、現在の左京区北大路は当時存在せず下京区北小路が正しいであろう。この点を金沢前田家の子孫の友人に古書の探索を依頼し居住所を調査したが不明であった。ただ貝原益軒の知人名簿『旧識』に稻生若水の名が記され、夷川上町高倉通り柳馬場西側の住所が記されていることを佐古田あい氏は報告している<sup>10)</sup>。これが死亡時の自宅住所とは断定できないが、

下京区北小路は七条通より1本北の東西通であり、一方夷川通は東西通で柳馬場・高倉通は南北通であり御所のすぐ南の中京区に位置する。死亡場所は定かでないが、若水の分骨された稻生家墓が左京区浄土寺真如町の迎称寺にあり、真如堂のほか真北、山門前に「洛東九番萩乃靈場迎称寺」なる石碑があり、土壠沿いに萩が植えられて見頃の9月には萩の寺と化す。寺の東側に墓地入口があり少し進むと無縁墓域に若水旧墓碑、最も奥へ進むと改修された若水稻彥信之墓がある。

市バスで銀閣寺行に乗り浄土寺で下車、スーパーFRESCO手前で西に向かって上ること15分で真如町に至り、その突き当たりが迎称寺。

**一口メモ⑥** 自然界に存在するものを収集・分類することは古くギリシャ・ローマ時代から行われ博物学と一般に呼ばれるが、わが国においては「本草学」と呼ばれ、決して薬草だけでなく、植物・動物のみならず昆虫・魚類・鳥類に加え鉱物をも含む広範な研究の総称であり、博物学と同意語である。京都では稻生若水の孫弟子に当たるもう一人の本草家小野蘭山（1729～1810）が江戸時代後期に現れ本草学者・博物学者として活躍し漢方医学に多大の貢献をしており、シーボルトは彼を“日本のリンネ”と呼んだという。25歳から



小野蘭山顕頌碑（京都府立植物園）

私塾衆芳軒で本草学を教え、名声は幕府まで届き71歳で幕府の命で仕官し江戸医学館での講義をまとめて『本草綱目啓蒙』を著しこれを教科書としても使用した。漢方薬草医学だけでなく、博物学もよくした京医（京都から江戸に召された医家）であるが彼の墓所は京都ではなく東京都練馬区の迎接院である。ただ私の散歩で訪れる京都府立植物園内の芝生広場北東端には2010年没後200年の記念事業として彼の顕彰碑が建立され、「小野蘭山顕頌碑」なる題額に加え彼の肖像と秋芍薬カラー画像が説明文と共にめ込まれ現在も綺麗に保存されている。

#### 参考文献

- 6) 服部忠弘『医の旅路はるか曲直瀬道三とその師田代三喜篇』Parade books、大阪、2011
- 7) 山崎光夫『小説 曲直瀬道三 亂世を医やす人』東洋経済新報社、東京、2018
- 8) 守屋正「江戸時代の京都における医の倫理の史的考察」日本歴史學雑誌、1982;28 (2):150-163
- 9) 葉山美知子「『医学天正記』に記された人物たちの治験録とその時代背景」日本歴史學雑誌、2013;59 (2):234
- 10) 佐古田あい「雨森敬太郎薬房所蔵『覚』について：稻生若水との関係に注目して」歴史民俗学研究、2016;1:77-85

# 石碑を巡る京都医史跡散歩

## —京都医学史とその史跡—

(3)

廣瀬 源二郎



### 五、江戸時代中期の医学・医療

曲直瀬道三流の医学が広まつた後世派の江戸前期頃から、実証を伴わず陰陽五行説に基づく理論中心の李朱医学を離れて、実証主義を取り入れた中国古代の医学『傷寒論』<sup>（ロメモ）</sup>、明の喻嘉言の『傷寒尚論』を取り入れる医学が始まったのが江戸中期である。

**一口メモ①** 「傷寒論」とは紀元200年頃（後漢末期から三国時代）張仲景により書かれた中国漢方医学の原典で、『黄帝内經』や『神農本草經』の思想を受け継ぎ、具体的な薬物療法に関する漢方理論のみならず、医者の心得なども書かれているとされる。長い中国の歴史の中で各時代の薬師・医師がさらに実証研究し常に更新されてきた医書であり、明末清初期の『傷寒尚論』も東洋医学では重要な書と考えられている。なお傷寒とは風邪や細菌などの急性感染性熱病や風寒の邪により生体が傷つくこ

とと定義されている。

#### ◎名古屋玄医

江戸時代の初期にはわが国の医学は曲直瀬道三の率いる後世派が隆盛を極めた中で、この瞑想的空論の多い金元医学から離れて古い時代の実践漢方学『傷寒論』を学ぼうとした臨床重視の実学派が出現し、18世紀には勢力を伸ばしそれぞれが古方家と呼ばれる漢方医家からなる一派が出来上がった。この派の始祖とされるのが名古屋玄医（1628～1696）である。彼の考え方を継承した門人が後藤良山であり、その門人が山脇東洋や香川修庵であり、空理空論から離れて古くからの実証に基づく張仲景の『傷寒論』や『傷寒尚論』を取り入れたことで後に古方派（古医方派）と呼ばれるようになり、江戸中期以降には後世派を圧倒し、今日まで漢方医学の主流となっている。

彼の墓は京都市上京区浄福寺通一条上ルにある。市バスで千本通今出川下車、千本通を南に

300mほど下ると平安京の創設時1220年ほど前に建設された最北端の東西に通ずる一条通に到達する。ただ一条通は平安京の時代に造設されたままなのか、驚くことに極めて細い3m幅の古い道路である。これを東に向かい約100mで左手北側に「浄福寺参道」の石碑があり、その先が浄福寺山門となる。現在は寺院内で幼稚園を経営している大きな寺院である。真っ直ぐ進むと本堂であり、その左側に墓地への門があり、墓地の裏側にはマンションビル群が高く聳えている。門をくぐって真っ直ぐ進むと4列目の右手2mに二つの墓石からなる名古屋玄医の墓がある。手前の墓石は風化が酷く認識できないが奥に墓碑「宜春庵翁丹水先生墓」とある墓石が彼のものである。裏面にある碑文の判読は朽ちて難しい。

名古屋玄医は寛永5年京都で生まれ、字は富潤、またの名をえつほ、室号を宜春庵、晩年には丹水と号した。幼少時から病弱で、足が不自由で言葉も吃音であったが読み書きに秀でており、

足利学校の羽州宗純に経学（孔子の学問）を学んだという。花輪壽彦氏によれば17世紀前半から中国の新しい医書が沢山わが国にも流通するようになり、時代の流れに沿って玄医は壮年に達してから医学に転じ後漢末期の張仲景『傷寒論』や明末清初期の喻嘉言『傷寒尚論』（1648年刊）を見つけ一所懸命に学んで儒学と医学を結びつけて儒医となったという<sup>11)</sup>。医学の師としては不明な点も多いが、小曾戸洋氏によれば「医聖」曲直瀬道三の流れを汲む曲直瀬玄由の門人福井慮庵であるという。医家を名乗るに当たり曲直瀬玄由・玄由から玄怡という名を与えられるも玄医（玄人の医者）と自身で改名したという<sup>12)</sup>。

田代三喜や曲直瀬道三の李朱医学ではその病因を明らかにせずに陰陽虚実の儒学的空論を掲げて医療をすることを嫌い、『傷寒論』のように古いが長く実証

された漢方医学を治療方針とすべきと唱えることで既存の道三流後世派に対して古医方を徐々に大きな医療の流れとした医家であり、古方派の祖と呼ばれる所以である。京都の革新的医師の間で共鳴を得て、多くの門人を抱え実地臨床を教えることで古医方一派を形成した。曲直瀬道三流の李朱漢方学が100年余り平安の医界を先導していたが、『傷寒論』特に『傷寒尚論』に帰すべきと唱道して京都医界は一変したという。しかしこの学派は曲直瀬流の李朱医学を基盤とする後世派学説を完全に否定したわけではなく、古典への回帰、『傷寒論』を漢方医学思想の基本とし実証主義（見証についてのみ治療）を持ち込んだ。その弟子に後藤良山、香川修庵、山脇東洋らが輩出し、実証の最たる邦人死体の観察にまで至ったのが京都医家の主流である。この漢方医学が現在の東洋医学の主流



後藤良山（『医家先哲肖像集』藤浪剛一編／国立国会図書館デジタルコレクションより）

に留まっているようである。

### ◎後藤良山

名古屋玄医の古方派の流れを革新的な考え方で支持して実証主義を重んじる精神から日本最初の腑分けと解剖書発刊に辿り着いた山脇東洋の師であり、彼がいかなる背景、考え方を持って古方派を確固たる学派に築き上げたかを探るのも大変興味が湧くことである。



浄福寺山門（千本通今出川下ル一条通）



名古屋玄医の墓（浄福寺内）

後藤良山（1659～1733）は江戸に生まれ本名後藤達、字は有成、俗称左一郎、号が養庵、後に良山と号した。江戸時代中期の平安（京都）の医師で山脇東洋の恩師として知られている。

数回の江戸火災で家財を失くし1685年27歳で江戸から新天地を求めて京都室町に移り医業開始、田代三喜らの金元医学が陰陽五行説などの空理空論に流れる医療を嫌った医師で、何事も自分で試してみる実証主義「親試実験」を唱えた。

医師が僧侶を兼ねることを嫌い、髪型も剃毛せず髪を束ね僧衣を平服に変えて医業を仏教（僧）から分離し医学の革新的運動を平安京で実践した。彼の師は古医方を最初に唱道した名古屋玄医であり、後漢末の張仲景が『傷寒論』の中で主張した実証主義に戻ることをめざす医学革新を唱え、後に門人である山脇東洋、香川修庵らに古方派

と呼ばれた古医方医家の先駆牽引者として知られている。その診察法にも従来の望・問・聞・切（視診、問診、聴診、脈触診）に加え、腹部・背部・手足をも視診・触診し、さらに病人の匂いを嗅いで診断した。後継の弟子のひとり永富独嘯庵の著作『漫遊雜記』によると、良山は将来の進路について考え嘆き、儒学を修めんとすると上に伊藤仁斎、僧になろうとすると隱元和尚がおられるので、やむを得ず豪傑逸才の先人のいない医界にて偉くなろうと奮闘決意し、一所懸命死力をつくして医道を修め遂に古医方の第一人者となったという。

彼は病因論として「一氣留滯説」を唱え、万病は一氣の留滯により起こるとした。一氣とは天地に充満し万物を生ずる活力・元気であり、このアンバランスが病気であるとした。風・寒・湿氣で一気が滞り、また食事、七情によっても滞るとして、偏

った食事、精神的ストレスをも病因と捉えているのが興味深い。近代医学での“食事療法”や“病は気から”的概念の始まりともいえよう。時の將軍吉宗公がヨーロッパ学問導入にも理解を示したことから、非科学的な中国医学を嫌いオランダ医学にも関心を示していたとされる。

彼の治療法は『傷寒論』に限らず民間療法で効果のある薬方を広く利用して、手近に使用できるもの、温泉（特に城崎温泉を唱道）、熊の胆、灸を常用したことから“湯熊灸庵”と綽名されたという。貧しい人、身分の低い人も差別することなく医療を施し、開業20余年で平安の地で名声を得て、その門下生は200余人に及んだというが医書は残していない。

享保18年に75歳で死亡し、京都市千本北大路上品蓮台寺に葬られた。その碑文「養庵先生後藤君之墓」とあるのは同門の

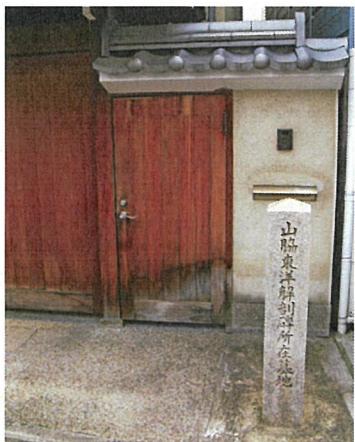


上品蓮台寺山門



養庵先生・後藤良山の墓（上品蓮台寺内）

<p>医家香川修徳（後述）による銘とされる。</p> <p>上品蓮台寺は真言宗智山派の寺院で、聖徳太子の母の菩提寺として宇多天皇が中興した寺と伝えられている。市バスで容易に辿り着ける。洛北に位置する北大路通に出よう。京都駅からなら東回りと西回りのバスがあり河原町通か西大路通を上り北大路通の千本北大路に行くバスがある（205番）。下車して千本通を下ルこと約100mで通りの西側に立派な山門のある上品蓮台寺（京都市北区紫野十二坊町33-1）に到着する。嘗ては千本十二坊と呼ばれた塔頭十二坊からなる大きな名刹寺院であったが、時の流れと共に寺領を失い現在は三坊のみからなる寺院である。しかしこの本坊内には後藤艮山の墓はない。墓地は普門院墓地と呼ばれ、寺の前の横断歩道を渡り東側千本通下ルことさらに30mでコンクリート埠に囲まれた墓地に着くが、小さな木製門にも彼の墓所なる記名碑はない。室町時代の金工後藤祐乘（同姓であるが姻戚関係なし）の墓所碑と富士谷先生墓所の碑があるだけである。南脇の狭い木戸入口を入り墓地内を北側に進むと一段と高くなった場所に後藤家の墓がある。相当荒れ風化した墓群であったが、令和2年4月に日本医史学会関西支部のお世話を整備され新しい記念碑と共に家族の墓石がまとめられ、妻、長男、母に加え祖</p>	<p>父母、伯父・伯母、宗山正英の墓石に後藤椿菴先生、栗庵先生に加え養菴先生の墓石が真ん中に置かれ合計九つの墓石が枠内に整然と建立された。</p> <h3>◎医家山脇東洋</h3> <p>日本の医師の誰もが知っている京都の医家で、小説家吉村昭の『日本医家伝』でも最初に列挙されていて最も知名度の高い医家は山脇東洋先生（1705～1762）であろう<sup>13)</sup>。山脇東洋は江戸時代中期の吉宗、家重時代に平安京で活躍した医家である。京都の繁華街のど真ん中にある意外な山脇東洋墓地を訪れるのも極めて興味深い散策である。</p> <p>市バス河原町通三条で下車して河原町を40mほど下ルと三条通であり、河原町を境に東は開けた鴨川・川端通・東大路通に通じる広い通りであるが、河原町から西へは車の通れない歩道だけのアーケード街が河原町通から寺町通まである。この通りには古くからの京都名店も多く、刃物店菊一文字、京仏具吉田源之丞老舗、浮世絵専門店西春、扇子の大西京扇堂、老舗料理店田毎に加え、最近では新しい食べ物屋が沢山進出し華やかになっている。西へ進むこと約100mで左に京都では有名な音楽専門店十字屋JEUGIA（楽器、楽譜、CD、音楽会チケットなど販売）があり、そこを左に曲がるのが新京極であり、三条と四条の間にのみ南北に延びる古い繁華街</p>	 <p>山脇東洋（『医家先哲肖像集』藤浪剛一編／国立国会図書館デジタルコレクションより）</p> <p>であり京都人のみならずお上りさん、修学旅行生や多くの外人が必ず訪れる通りである。この新京極坂道を三条通から下ル（南進）こと50mで左（東側）に大きな黒いビル二つ「MOVIX京都」が現れる。昔の映画館街であり、旧京都ロキシーと松竹座がその名を変えてエンターテイメントセンターとして蘇っている。この黒塗ビルの間に東に抜ける道があり、これを進むと突き当たりは白木づくり民家風門構えの家がある。墓所とは思えない個人宅風の玄関門でありびっくりするが、門前に「山脇東洋解剖碑所在墓地」と銘した石碑があり、潜り戸を中に入ると墓守が住む洋風の玄関がありすぐ左に進むと誓願寺墓地（中京区新京極三条下ル東入）となる。</p> <p>この墓地は山脇東洋だけでなく、落語の元祖としてあがめられる誓願寺第五十五世法主「安楽庵策伝上人」の墓地としても知られている。三条・四条の河</p>
--	---	---



誓願寺墓地の民家風入口



法眼・山脇東洋の墓 (誓願寺墓地内)



山脇東洋墓屋と銘板 (誓願寺墓地内)



総本山誓願寺



山脇社中解剖  
供養塔 (誓願  
寺墓地内)

原町繁華街のど真ん中にこんな大きな墓地が未だにあるのにびっくりするであろう。墓地の入口からすぐのところに小さな屋根に覆われた法眼東洋山脇先生墓と銘した墓石がある。山脇家墓地は古くから京都市伏見区真宗院にあるが、遠方であることから京都市内新京極の誓願寺墓地内にも墓があるわけである。山脇東洋の墓石は平成6年に山脇東洋顕彰会が彼を顕彰する際に墓石が朽ちるのを防ぐため簡

単な屋根を設え顕彰の木製説明板が掲げられているが今では殆ど読めない。法名は東洋である。彼の一族（東門、東園ら）の墓も隣にある。彼の墓石の斜め前に相当する場所に山脇社中解剖供養塔が墓碑整備記念之碑として置かれ14人の戒名が刻まれている。これは昭和51年に六角獄舎跡に山脇東洋觀識之地記念碑建立の際に顕彰会が墓地の整備をして他所から東洋墓碑近くに移したものであるが新しい

複製であり、実物は京都大学総合博物館内に展示されている。

新京極の隣を南北に走る通りは寺町通であり、この近辺には文字通り多くの寺がある。その中にこの墓地を所有する誓願寺がある。先ほど東に曲がったMOVIX京都のある新京極に戻り、50～60mほど下ると浄土宗西山深草派總本山誓願寺がある。ここで新京極はやや西側に折れ四条通に繋がる。誓願寺は江戸末期には広大な寺域を保有

するも明治維新で土地を没収され約3分の1となった。山脇東洋は死刑囚屈嘉の解剖1カ月後にこの誓願寺塔頭隨心庵で慰靈法要を営んだといわれており、これが今日広く全国の医学部で行われるようになった解剖慰靈祭の滥觴である。

誓願寺墓地を参観した後で、時間に余裕があり美術に興味のある方は是非近くの宝蔵寺を訪ねたい。墓地を出て新京極に戻らずにすぐに左へ向かい土塹続きの裏寺町の寺を通り過ぎ下ルこと100mほどで左側に宝蔵寺の門構えが現れる。ここには今人気の江戸中期の画家伊藤若冲が建てた伊藤家親族の墓がある。伊藤家は近くの錦市場で青物商を営んでおり、ここが菩提寺であり、門を入れるとすぐ左に伊藤家親族の黒御影石墓と伊藤若冲の建立碑がある。伊藤家の墓石には彼の描いた髑髏図が彫り込まれている。本物は寺内に



宝蔵寺の伊藤家墓

あるが公開はされていない。最近は若者にも人気があり訪れる人が絶えない。

京都の医家で最も広く医師に知られている医官は山脇東洋先生であろう。山脇東洋の先祖は河内国楠木正成の流れを継ぐ山脇家だが、山脇玄脩の門人医家清水立安の子として京都龜山で生まれ尚徳と命名され通称は道作（医者呼び名）、東洋は後の号である。1726年に山脇家法眼山脇玄脩の養子となる。1727年10月玄脩死去と共にその遺跡を継ぎ2年後には法眼の位に叙せられている。古医方の後藤良山から理論より実地臨床を重く見る科学性のある実証医学を学んだ。五臓（肺・心・脾・肝・腎）六腑（大腸・小腸・胃・胆嚢・膀胱・三焦）の疑問を解くにはどうすれば良いかと師である良山に尋ねたところ、科学的な実証精神のある彼は、解剖して身体の中を観るのが一番だがお上の許可が下りないであろうからやむを得ずヒトに近いカワウソを解剖することが良いであろうと教えを受けた。この頃には既に外国から解剖学書を含む医学書が輸入されており、それらを垣間見ることもあったと考えられ、師の教えに納得できず仲間である小浜藩医原松庵や伊藤友信らと当時京都所司代であった小浜藩主酒井忠用に腑分けの許可を願い出て許しを得たため、1754年2月に京都六角獄舎で死刑囚屈嘉（38歳）の斬首刑に処

せられ首のない死体の腑分けに立ち会い、日本最初の人体解剖で詳細に観察して、その観臓（解剖）成果を記録し解剖図録を盛り込んだ『藏志』を5年後の12月（1759年）に“醫官平安山脇尚徳謹シデ録ス”として平安養寿院から出版し、旧来の身体部位認識の誤りを指摘した。これ以降日本の至るところで人体解剖が行われるようになり、1758年3月に栗山孝庵が萩で、同年5月に伊良子光顕が伏見平戸島で解剖を行っている（後述）。この頃になると雑役者に代わり外科医自身が自分のメスで腑分けをしたという。しかし一般人には残酷な腑分けはすべきでないと意見も多く、また医家の中にも治療には役立たないとする意見もあったという。

わが国の近代医学が山脇東洋の腑分け・観臓に始まり、さらにその後の蘭学を翻訳した『解体新書』をもとに展開したわけである。東洋は引き続き医家として働くも1762年8月8日58歳で死亡した。京都市伏見区深草真宗院に葬られるが、京都市内新京極の誓願寺墓地内にも墓があるのは前に記した通りである。

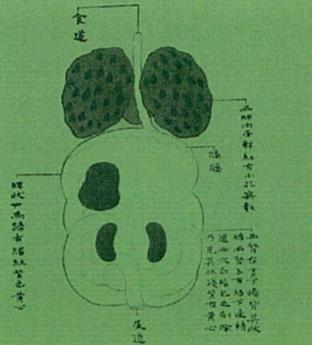
#### 参考文献

- 11) 花輪壽彦 漢方医人列伝「名古屋玄医」 TSUMURA Medical Today  
2009年7月22日放送  
[https://www.radionikkei.jp/kampo\\_today/docs/kampo-090722.pdf](https://www.radionikkei.jp/kampo_today/docs/kampo-090722.pdf)
- 12) 小曾戸洋 「漢方のたからもの（22）名古屋玄医とその著書」 漢方と診療、  
2012;3(3):222-223
- 13) 吉村昭 「日本医家伝」 講談社文庫、  
東京、1973

# 石碑を巡る京都医史跡散歩 —京都医学史とその史跡—

(4)

廣瀬 源二郎



## ◎山脇東洋観臓之地記念碑

日本最初の腑分けが行われた場所である六角獄舎跡も見つからており、中京区大宮通六角のマンションの一角（中京区六角通神泉苑西入南側、市バスか阪急電車で四条大宮下車、四条大宮通上ル六角通西入武信稲荷神社をめざすと神社左隣）に日本医師会と京都府医師会、医史学会などが協力して山脇東洋顕彰会を作り、日本近代医学発祥の地に「山脇東洋観臓之地」として記念碑を設けている。なお同獄舎は幕末混乱時の勤王志士平野國臣ら数十人の処刑の場所でもあり、終焉の碑が隣に並んで設けられている。

彼の著書『藏志』は日本で最

初の日本人を解剖してできた実証解剖図譜であり極めて貴重なものである。『藏志』の中で「艮山先生曰ク解ハ官ノ制スル所犯スペカラズ已ム無ク獵（カワウソ）ナリ。聞クトコロソノ臟人ニ肖（似）ル。之ヲ解ス者數有」で獵の解剖を行うことを教えられるも、西洋の解剖図を垣間見て疑問を持ち五臓六腑をヒトで見るために行われたのが彼による観臓である。しかし大腸と小腸の区別ができるおらず、恐らく腑分けは獄舎の身分の低い職員にさせ腹部を開けてもらって外観を観察（観臓）したため、『藏志』図譜には大腸だけが腹内表面図として描かれている。『藏志』は乾坤二巻からなり、乾の巻は解剖で実際に見た記録、坤

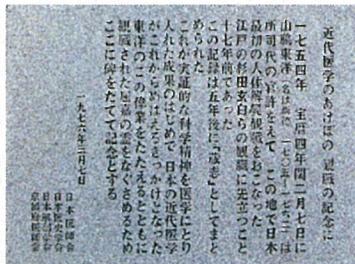
の巻では山脇東洋自身の医学的説明や既存の説などが書かれている。乾の巻に「剥胸腹圖」、「九臓前面圖」、「九臓背面圖」、「脊骨側面圖+心背面圖」五図四葉が掲載されている。しかし「九臓背面圖」にも腎臓は描かれているが大腸と区別される太さの細い小腸の図はない。（九臓前面圖・背面圖参照）

彼がいかなる観察をしたかに興味が湧く。図を描いたのは絵に巧みであった山脇東洋の門人伊勢山田浅沼佐盈とされ、どこかのプロセスで誤りが起きたのであろう。

因みに大腸と小腸との区別を明らかにしたのは和蘭医家の伊良子光顯とされ、日本で3番目の腑分けを山脇東洋に遅れるこ

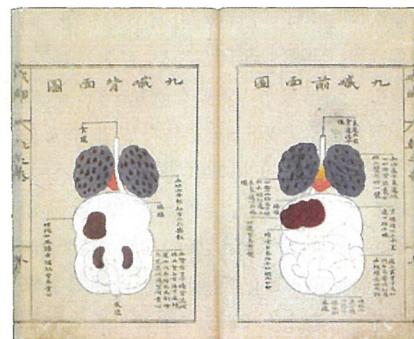


山脇東洋観臓之地と記念銘板



日本近代医学発祥と勤王志士碑

と4年の1758年5月伏見平戸島で行い発見したとされるが、彼の腑分けをもとに執筆された医書『外科訓蒙図彙』の発刊は1767年（明和4）であり、腹部の解剖図の記載はない。ペレ外科書の抄訳をした本書の下巻、腹股之部の2頁3行目に小さな活字で書き込みがあり、「山脇尚徳ハ藏志ノ中デ腸ニ大小ノ別ナキノ説挙グ、……先生（伊良子光顕）門人ノタメニ屍ヲ官ニ請イテ伏水ノ平戸島ニ於イテ之ヲ解ク。始テ腸ニ大小ノ別アルヲ観又古書ノ妄作ヲ識ル故ニ先生別ニ浣腸論一編並ニ觀臟骨節図絵ヲ著述シ山脇佐野二氏の誤ヲ正シ後学ノ惑ヲ解クノミ」とかなり手厳しい6行を本文中に挿入しているが、大腸・小腸を区別した図は見られない。私の調べた解剖図で大腸と小腸が区別されている最も古い記載は、本邦で4番目の腑分けとされる1770年河口宏齋（信任）がその2年後に編纂出版した『解屍編』：餘済明画（京都林伊兵衛等発行）の藏府前面之圖である<sup>14)</sup>。因みに江戸小塚原での前野良沢・杉田玄白らの刑屍解剖は1771年であった。現在この『解屍編』もインターネットで閲覧することができ、京都大学附属図書館に蔵されカラー印刷された原図を閲覧でき、またコピーも許されている。特に大腸と小腸を比べて図示した藏府前面之圖に加え、大腸と小腸を腹腔から取り出して腸間膜などの脂肪組織をも取



「藏志」の九臓前面・背面図の両頁。大腸・小腸の区別はない。  
(千葉大学附属図書館亥鼻分館所蔵／タイトル部分はこの画像を改変して使用)



『解屍編』  
藏府前面之圖（左）、  
大小腸除脂之圖（右）  
(京都大学附属図書館所蔵)

り除いた大小腸も別に「大小腸除脂之圖」として小腸から肛門まで図示されており、途中に小腸から大腸に移行する部位も指示されているのは驚きである。  
(藏府前面之圖、京都大学附属図書館蔵)

『藏志』の脊骨側面圖中には“脊骨十七節有鱗如魚……”なる記載があり、本文中にも同様の記載があるが、図には18個の脊椎骨が画かれている。脊柱は頸椎から腰椎までの24椎骨に仙骨と尾骨からなることから、恐らく頭蓋骨と頸椎を外した斬首死体の胸椎と腰椎を数えて17節としたのであろう。しかし椎体は18個描かれており17節は文字通りフシ（境目）の椎間板を

指すのであろうか。次の文章に“自骨頭至腰間上細下巨”とあり、骨頭より腰間に至り、上部が細く下部が太いと記載し長さ一尺七寸九分、径は上から5番目で一寸五分、16番目で二寸三分であることからこれらは正確な記載と考えられる。また脊骨背面には鱗があり魚の如しとの記載は棘突起や棘間韌帯を指すのであろう。(脊骨側面圖、参照千葉大学附属図書館亥鼻分館蔵)。

小川鼎三氏は山脇家にはパドア大学教授ヴェスリングの解剖書が所蔵されていた模様と『医学の歴史』(中公新書)に書いておられる。私が『解体新書』(1774年刊)の原本コピーを調べてみると当時既に幾つかの西洋解剖

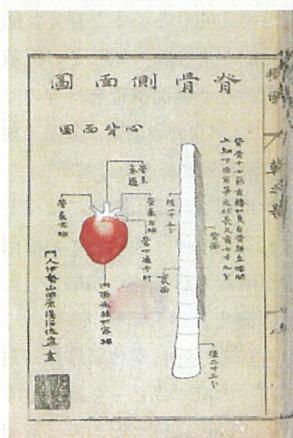
書が輸入され高名な医家、桂川法眼、前野良沢、中川淳菴らはそれらを所蔵しており、その中で山脇法眼所蔵の解剖書は「苛私林牛私解體書」とあり、「ヘスリンキス」とカタカナが振ってある。ヘスリンキスがVeslingの日本読みなのかを検討したところ、Ghosh氏によれば彼のラテン名は Joannes Veslingius (1598 ~ 1649) であることが確認できた<sup>15)</sup>。さらにラテン語で書かれた彼の解剖書『Syntagma Anatomicum』の著者名にもラテン名が載っている。『解体新書』にある「苛私林牛私解體書」は彼の氏名のラテン読みフェスリンギュウス(林牛私)を漢字に当てたと読める。本書は1641年初版、1647年に24図版と共に増補版が出版されており、Ghosh氏によれば、パドア大学における人体解剖に基づく彼の本書は17世紀後半から18世紀前半にかけヨーロッパで人気の解剖学教科書であつたらしく、ラテン語のみな

らず、ドイツ語、オランダ語、英語版も発刊されて、リンパ管系、循環系の重要な研究を行い、胸管や Willis動脈輪を Willisに先んじて最初に記載図示している<sup>15)</sup>。パドア大学解剖学125年記念の論文には彼の名前が Johann Wesling (Veslingius) 解剖学教授として紹介されている<sup>16)</sup>。これらの事実から私は山脇法眼が間違いなくこの解体書を所蔵していたと考える。因みに『解体新書』の原本『解剖学表ターヘル・アナトミア』は、ドイツ人 Johann Adam Kulmus (1689 ~ 1745) の『Anatomische Tabellen』のオランダ語訳本『Ontleedkundige Tafelen』であり、Ghosh氏によれば、その殆どの図版は Vesling の『Syntagma Anatomicum』から転載されているという。イタリアにおけるヒト解剖図およびワックス標本の発達推移は Riva の報告に詳しい<sup>17)</sup>。因みに「神経」なる用語がわが国で最初に記載されたのはこの『解体新

書』であり、小川氏によれば、オランダ語 Zenuw 世奴 (セイヌ・セイヌ) は神氣から神、經脈から經をとり「神経」と訳されたという<sup>18)</sup>。『解体新書』訳本には酒井亘氏の優れた労作があり、全頁が復元され漢文表記も現代語に訳されて読解可能である<sup>19)</sup>。

解剖学の歴史および解剖学教科書については、私の学生時代に懇切な教えを受けた尊敬する恩師藤田尚男教授（大阪大学名誉教授）の著書『人体解剖のルネサンス』に詳しい<sup>20)</sup>。

また醫官山脇尚徳（東洋）は『藏志』の附録「祭夢覺文」の中で腑分けされた死刑囚屈嘉に特別に感謝の意を示し、「夢覚」なる戒名をつけ、これまで判つていなかった人体内部の構造が初めて明らかになったとして、「名節泰山ヨリ重ク、青史百世ニ鳴ル……、骨ハ朽チテモ、功ハ朽チズ」と弔辞を述べ手厚く葬っている。



「藏志」脊骨側面圖  
(千葉大学附属図書館亥鼻分館所蔵)



Joannes Veslingius 像  
(『Syntagma Anatomicum』より)

**一口メモ①** 「藏志」の閲覧を探したところ、京都で歩いて探すよりはインターネット上で早稲田大学図書館および千葉大学附属図書館が本誌の平安養寿院蔵版をカラー印刷で全二巻（乾之巻と坤之巻）を一般人に無料で供されていることが判明した。興味をお持ちの方はこれらを供覧されることをお勧めする。『藏志』乾の巻（早稲田大学図書館蔵書）の表紙には内容がまとめて書かれており、序、藏志図、

附録として祭夢覺文、中風偏枯説、気厥説、論業四項目がある。また坤の巻表紙にもその内容として宴東山序に始まり、種々の医学論十九編が記載されている。

日本最初の解剖書とされる『藏志』の出版は1759年であるが、諸外国の解剖書について調べてみると、1543年の近世解剖学の誕生ともいえるパドア大学教授のアンドレアス・ヴェサリウスによる『Fabrica』: De humani corporis fabrica libri septem (人体の構造に関する七章) の発刊である。しかしこの大著もアリストテレス、ガレノス、アラブのアビセンナ (イブン・シーナ) の医学書を参考にして編み出されたものである。とはいえた時200年以上も前に西洋では既に極めて精細な解剖書があったことは驚くべき医学の歴史である。勿論山脇東洋の藏した西洋解剖書は前述の『Syntagma Anatomicum』であり1641年には発刊され、図版を加えた増補版が1647年に出版されている。

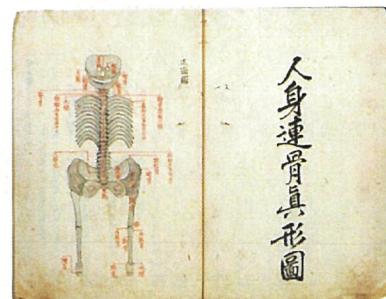
人体解剖の禁じられていたローマ時代にガレノス (130? ~ 199) は既に解剖書『De ossibus ad tirones』(Galen's Elementary Course on Bones. By Charles Singer English translation) の中でChapter 8~12において詳細に脊柱について記載しており、頸椎7個、胸椎12個、腰椎5個の計24個について述べ、その下にはさらに側方に広がった幅



『藏志』乾之卷 山脇尚徳著  
(千葉大学附属図書館亥鼻分館所蔵)



『藏志』坤之卷 山脇尚徳著  
(千葉大学附属図書館亥鼻分館所蔵)



『造物餘譚』人身連骨真形圖  
三浦梅園  
(提供:国東市三浦梅園資料館)

広い突起のある3部分からなる仙骨と4番目に相当する尾骨に終わると記載しており、実に千年以上前にヒト脊柱の解剖が正しく記載されている。

日本の解剖書については興味をそそる歴史がある。京都の眼科医であった根来東叔は1732年(享保17)に刑に処せられた2人の死骸が雨風に曝されマイラ化し放置されているのを見つけ興味を持って駿河観察して9年を費やして1741年に模写図と解説文からなる「人身連骨真形圖」を作成していた。これは山脇東洋による肺分け観臓より13年前のことである。これがその子東麟に受け継がれ、そこを訪れて図を見た豊後の国の医師・哲学

者三浦梅園 (1723 ~ 1789) はその歴史的重要性を認め、後世に伝えるため模写をして、彼の著書『造物餘譚』(1781年刊)に取り入れている。このことを九州大学名誉教授ヴォルフガング・ミヒエル氏は詳細報告している<sup>21) 22)</sup>。同図の原本コピー掛図が他にも残されているが、同氏は梅園図が原図に最も近いという。ただし図は極めて幼稚であり子供の画いた骨格のようである。さらに以前から私には気になっていた円山応挙の掛け軸がある(現在兵庫県美方郡大乗寺蔵)。京都円山派の祖として高名な円山応挙はそのずばぬけた写生力を使い1787年(天明7)に「波上白骨坐禅図」を描いている

(<http://museum.daijyōji.or.jp>)。極めて詳細な頭蓋骨、胸郭と骨盤およびそれぞれの骨関節部を含んだ全身骨格胡坐像であり、この詳しさは彼がどこかで観察しないと描けないものであり、15世紀末に描かれたレオナルド・ダ・ヴィンチの解剖骨格像にも迫る描写力に圧倒される。応挙は沢山の美人幽霊図も描いており、幽霊が絵から出てくると落語でも取り上げられるほどの写実性があり私の大好きな京都画家である。

#### ◎香川修庵墓地

香川修庵(1683～1755)は、後藤良山門下で山脇東洋と共に古方派を盛り立て引き継いだ医家である。名は太冲・修徳といい姫路で生まれ、村主明彦氏によれば18歳で儒学者伊藤仁斎に入門し3年間儒学を学び彼の高弟となる。さらに医学を修めんとして後藤良山に入門を願うも、儒学を十二分にマスターした修庵に教える医学はないとして断られるが、最後には入門を許され5年間にわたり良山の薰陶を受けた<sup>23) 24)</sup>。沢山の医書(素問、靈枢、難經など)を読破して、その内容は実際の医療には役立たないと厳しく指摘し、陰陽五行などの理論的医説を排し張仲景の『傷寒論』に傾倒してこれに立ち返ることを唱道した。医の基本は孔孟の教えに従うことで基本的原理は得られ、そのうえで本草学や古今医学書知識

を自身の経験で確認すること(親試実験)で正しい医療の道が開けるとした。すなわち医学も儒学も元は一本であるとした儒医一本論を唱え、自らを一本堂と号した。儒者が生活の援けに医業をすることを鋭く非難した。徹底した実証主義を貫くことで一派をなし、学究的でやや先鋭的な学徒であり道三の『啓迪集』を意識して『行余医言』など多くの著作を残した学者肌の医家であったが、村主明彦氏によれば多くの門人を要しながら、香川流医術としての発展をみることはなかったという<sup>24)</sup>。同僚・門人には山脇東洋、吉益東洞などが列しており、古方派の主流は彼らに移ったが、漢方医学の改革派として古方派をまとめて発展させた立役者の一人である。1755年仕事で播州へ旅してその帰路丹波の国古市で死亡、享年73歳であった。彼の墓地は洛西嵯峨の名刹二尊院にあり、秋には紅葉の馬場を進むこと30mで墓地に至り、その右外回りの道を登ること数分で登り路の外側に家族の墓群と共にあり、嵐山観光の際には是非立ち寄りたく、儒学の師伊藤仁斎家の墓は道の内側に隣接している。

また近くに立派な寺構えの淨土宗五台山清涼寺(嵯峨釈迦堂として有名)がある。京都駅から市バス28番嵐山・大覺寺行きで嵯峨釈迦堂前で下車。

清涼寺の開基である<sup>ちょうねん</sup>裔然上人が983年に中国に渡り、帰国時

に持ち帰った本尊の釈迦如来像は「三国伝来(インド、中国、日本)の釈迦像」として知られ、その後の日本釈迦像のモデルになったとされる国宝である。この如来像の背板を昭和29年に開けたところ胎内から多くの宝蔵品が見つかり、その中に絹製内臓模型(五臓)があった。現在本堂内の陳列棚の中にガラス越しに世界最古の貴重な模型医学史資料(レプリカ)が見られる。

#### ◎吉益東洞

吉益東洞(1702～1773)は、艮山門下で東洋、修庵らと並び称される古方医である。広島市中区橋本町界隈で医師畠山道庵の子として生まれた。名は為則、通称周助といい、紀州畠山の子孫という家格を重んずる矜持を生涯持続した豪傑で、19歳から金瘡医(刀傷治療学)と産科を学び、37歳(1738年)で京都に出て畠山から吉益姓を名乗り、天下の医師を志すも大志実らず、生活に困窮しやむなく木偶の坊人形づくりの内職で糊口を凌ぎつつ『傷寒論』を毎日手放さずに勉強したという。44歳の時、山脇東洋との運命的な出会いがあり、それ以降彼の医業は隆盛を極め、東洞院通竹屋町南入ルに住居を移すと共に、自宅兼医院住所の通り名をとり吉益周助から東洞と改名した。彼は強烈な個性の持ち主で「萬病一毒論」を唱え、全ての病気は一つの毒に起因し、毒の位置で病態が異

なるとして、それを制する薬効の強い生薬療法を実施し、近代医学中興の医師とされる<sup>25)</sup>。多くの著書も残し、殆どが呉秀三編『東洞全集』にまとめられている。小川鼎三氏によれば、医史学を最初に確立した富士川游氏が最も尊敬した3人の先哲医家（他に前野良沢、永富独嘯庵）の一人でもある。

山脇東洋との運命的出会いについては、杉立氏によれば、森枳園が浪人中に書き留めた『遊相醫話』にある。八十話からなる医事雑話の冒頭第一話にある文を要約すると、“木偶の坊などを収める問屋へ人形を持っていくと、忙しい雰囲気で何かと問うと問屋の老母が病氣である旨を聞き、自分も医者であると名乗り病床へ導かれ診脈だけならと診察を許された。今までどの医家に処方されたのかを問い合わせる家人が山脇道作（東洋）様と答えると、周助はその処方で治るであろうが、石膏を取りやめた方がさらに良いと考えるから、山脇先生が来られたら伝えるようになに家人に話した。”周助の処方など信じずに、家人はそのことを山脇先生に告げると調剤中に周助処方が正しいとし、その日から石膏を除いた周助処方に変更して著効を得た。それ以来山脇東洋は彼の医術を称え世に広く推挙した。これが東洞繁盛のきっかけだという。ただしこの書籍『遊相醫話』は必ずしも正しい史実を書き留めたものでは

なく、その信憑性には問題があるとする意見もあるが、かかるきっかけがあったのは事実であろう。

彼が診療と門弟の養成、著述に使った旧宅跡は中京区東洞院通竹屋町南入ルの竹間（ちっかんと読む）小学校の西側コンクリート塀の間に一時期あったが（杉立氏の『京の医史跡探訪』に写真）、竹間小学校も今やなくなり、竹間公園（竹屋町通と間之町通の南西角・判り易い目的地は京都で有名な京都市子育て支援総合センター「こどもみらい館」前の公園）となっており、その南西隅に京都市教育委員会の建立した大きな竹間小学校記念碑の脇に「名醫吉益東洞宅蹟」と記した石碑が植込みの中に垣間見える。彼の墓は東福寺境内塔頭莊嚴院に嫡子吉益南涯の墓と共にある。吉益南涯も有名な医家で父の萬病一毒論を発展させ「氣血水説」を唱えた。その弟子に当たるのが漢方に和蘭

外科を取り入れ乳癌患者で曼陀羅華を使用し世界初の全麻摘出手術に成功した外科医華岡青洲である。

#### 参考文献

- 14) 河口信任編『解屍編』：餘波明画（京都林伊兵衛等発行）1772 慶應義塾図書館、『ANATOMIA～ダ・ヴィンチから解剖図譜の歩み～』丸善出版、東京、1997
- 15) Ghosh SK. Johann Vesling (1598-1649) Seventeenth Century Anatomist of Padua and his Syntagma Anatomicum. Clin Anat 2014;27(8):1122-1127
- 16) Porzionato A, Macchi V, Stecco C, et al. AAA 125th Anniversary. Many Faces of Anatomy. The Anatomical School of Padua. Anat Rec. 2012;295(6):902-916
- 17) Riva A, Conti G, Solinas P, Loy F. The evolution of anatomical illustration and wax modelling in Italy from the 16th to early 19th centuries. J Anat 2010;216:209-222
- 18) 小川鼎三『解体新書の神経学』順天堂医学、1969;15(1):29-33
- 19) 酒井亘訳編『ターヘル・アナトミアと解体新書』名古屋大学出版会、名古屋、1986
- 20) 藤田尚男『人体解剖のルネサンス』平凡社、東京、1989
- 21) ヴォルフガング・ミヒエル『屍骸を観る一根來東叔の「人身遮骨眞形図」とその位置づけについて』中津市歴史民俗資料館 分館 医家史料館叢書、第11号、中津市、2012年3月、pp42-89.
- 22) Wolfgang M. The true shape of human bones-On the dawn of anatomical dissections in early modern Japan. In Bulletin of the 4th International Symposium on the History of Indigenous Knowledge. Saga, Oct 2014, pp37-44.
- 23) 町泉寿郎「香川修庵の「儒医一本」の儒について－『大学叢』を中心として』日本醫史學雜誌、1998;44(1):49-72
- 24) 村主明彦 漢方医人列伝「香川修庵」TSUMURA Medical Today 2009年10月28日放送 [https://www.radionikkei.jp/kampo\\_today/docs/kampo-091028.pdf](https://www.radionikkei.jp/kampo_today/docs/kampo-091028.pdf)
- 25) 花輪壽彦 漢方医人列伝「吉益東洞」TSUMURA Medical Today 2010年1月27日放送 [https://www.radionikkei.jp/kampo\\_today/docs/kampo-100127.pdf](https://www.radionikkei.jp/kampo_today/docs/kampo-100127.pdf)



竹間公園吉益東洞旧宅蹟



# 石碑を巡る京都医史跡散歩 —京都医学史とその史跡—

(5)

廣瀬 源二郎

## 六、近代産科学の元祖、賀川玄悦

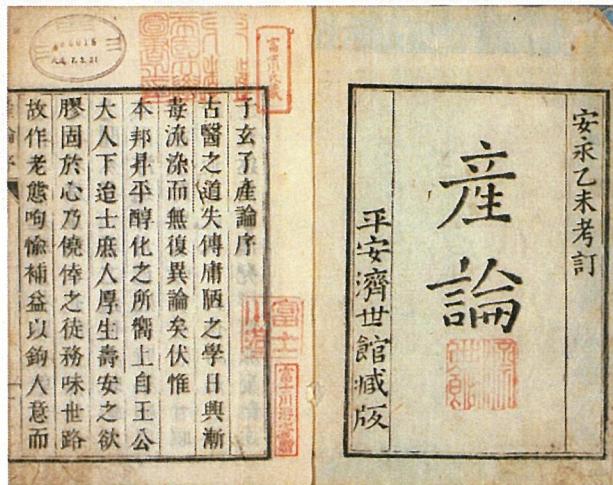
医学の本流ではないが、医学の中で極めて重要な産科学が京都で江戸時代中期以降発達し、世界的なレベルに達していたのは驚きである。

賀川玄悦（1700～1777）の父は彦根藩士三浦長富で庶子（正室の子でない）として滋賀県彦根に生まれ、名を光森、字は子玄と称した。7歳で母の実家の

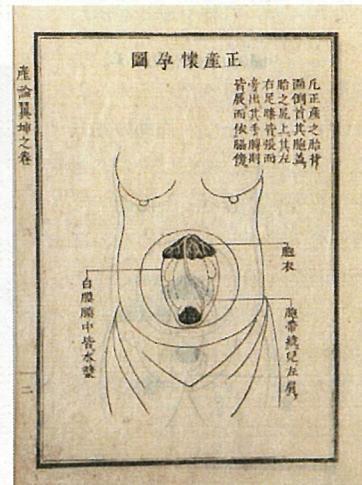
賀川姓を名乗った。杉立義一氏によれば、彼の才能と学問への意欲は極めて強く、30歳以降に都に出たという<sup>2)</sup>。京都西南の町はずれ一貫町で昼は古鉄業、夜は彦根で覚えた鍼灸・按摩で生計を立てていた。町内の多くの人は市外の湿地で環境の良くない地に集まつた難民ではあつたが、賀川家は彦根藩士の武家出身であり、御典医の家柄であるとして尊敬を受けていたといふ。貧しい家の妊娠を自宅に寄宿させて、妊娠経過を自身で確

かめ、また当時高貴な女性には触診ができなかつたところを、自分の指で触診することで産科学を師匠なしで数々の制限を乗り越え実地体験したといふ。彼の業績の最たるもののは、正常胎位の発見である。

昔から経験的に胎児は頭を上、臀部を下にして子宮内にとどまり、陣痛が始まると頭が下がり一回転して分婏胎位となるとされた。これが誤りであり、妊娠中期頃から徐々に頭が下に臀部が上に回転し始め頭位となるこ



『产論』賀川玄悦著（京都大学附属図書館所蔵）



『产論翼』賀川玄迪著（京都大学附属図書館所蔵）

とを1750年頃見つけて1765年に『産論』に著しており、西洋でも同じ頃の1754年英国産科医ウイリアム・スメリー（1697～1763）が同様の正常胎位の所見を報告している<sup>26)</sup>。正常胎位の最初の図は玄悦の養子玄迪が1775年に『産論翼』としてさらに精細な懷孕図32種を加え養父玄悦の初版本を補っており、わが国の業績として高く評価されている。玄悦の業績がすばらしいことは『解体新書』（1774年刊・巻四の13頁最後行より14頁）にも取り上げられており、「訳官檜林氏ノ所蔵スイギリス産科書ヲ視ル。ソノ言解セズト言エドソノ圖ヲ閲スレバ則チ、受胎ヨリ臨産ニ至リテ倒居セザル者無シ。ソノ否ナル者即チ皆難産ノ状ナリ、是レ和蘭ノ人未ダソノ理ヲ窮メズ、故ニソノ説ヲ為サザルナリ、イギリスト人則チ已ニ其ノ理ヲ窮ム、故ニ之図ヲ製スル詳悉斯クノ如シ。子玄子（賀川子玄＝玄悦）ノ説暗ニ之ト合ウ」と記している。

彼の産科学は長崎に来たシーポルトの知るところになり、その独自性を玄悦の門人から伝え聞き彼の産科学をバタヴィア、フランスの医学雑誌に紹介報告しているという。

彼の墓地は下京区中堂寺西寺町17の玉樹寺にあり、その門前には「産科鼻祖賀川玄悦先生之墓所」とある。JR線丹波口駅下車して五条通を東へ徒歩5分の壬生川通上ル100mで小路

を右折すると約80mで左側の寺に到着する。四条大宮駅からは南西へ向け徒歩約11分である。賀川家の墓石は風化が酷かったため、1943年日本婦人科学会総会が京都で開かれた折に、時の会長京都府立医大産婦人科教授山田一夫氏が新しい墓碑を再建された。1977年には同所に没後200年を記念して顕彰碑も建立されている。この墓石と顕彰碑も約50年の経過で風化が見られ、今や碑の判読が難しくなっている。

## 七、本居宣長修學之地 の碑

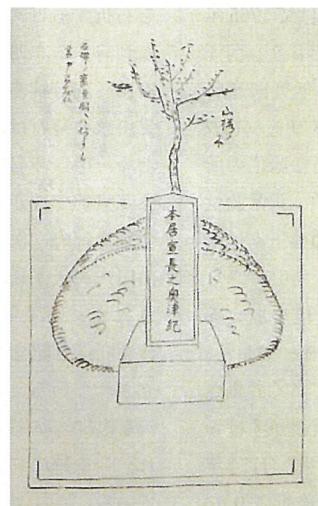
京都市のど真ん中、四条烏丸の交差点から歩いて数分で行けるところ（綾小路通室町西入ル南側）に小さな石碑があり、「本居宣長先生修學之地」と記している。少し探さないと見逃すほどの碑で、烏丸通の一つ西の室町を四条通から100mほど下ル綾小路通を西入ルこと約50mで南側やや奥まったビルの前広場西側道路沿い（室町通西入善長寺町）にボツンと立っている。ここは彼が上洛して4年間寄宿した儒医堀景山の自宅跡らしい。

本居宣長（1730～1801）は、伊勢松坂の木綿商小津定利の次男として生まれ、本名小津富之助、後に健蔵と改名した。小津家は曾祖父の代から江戸にも出店を持つ有力な商家であった。しかし11歳で父を亡くし、19

歳で養子となるが、22歳で義兄が亡くなり小津家を継いだ。しかし商売に興味はなく、母親の勧めで医師を志して23歳時に京都へ遊学した。広島藩儒医であった堀景山に入門・寄宿した。医術を堀元厚、景山の弟子小児科医武川幸順に、そして儒学を堀景山から学び入門時に姓を本居、名は26歳で宣長と改名した。この頃から医学よりも日本の古典学に興味を示し、荻生徂徠、契沖の影響を受け国学への道を進んだ。遊学中は青春を謳歌し、京文化を大いに楽しみ王朝文化への強いあこがれを抱くようになったという。4年後には郷里松坂に帰り医業を始め40年以上にわたり地元で小児科医として活躍、家伝薬をつくり調剤・販売まで手掛けていたとされるが、医師はあくまでも生活の手段であり男子本懐の仕事ではないと『家のむかし物語』に残し、夜は自身の研究である『万葉集』、『古事記』や王朝文学である『源氏物語』の国学研究・教育講演に充てていた。とはいえた医業をないがしろにしたわけではなく、眞面目に励み、几帳面な性格から、病家や調剤薬の数、謝礼の額までも毎日丹念に記し、その帳簿を『済世録』と名付け残している。小林秀雄氏の著書『本居宣長』によれば、医業が一番忙しかった時期の52歳時で病家448軒、調剤8165服、謝礼96両余と記されている<sup>27)</sup>。この帳簿は享和元年9月、「廿日、



本居宣長修學之地  
(四条宝町下ル西入)



遺言書の墓設計図  
(本居宣長記念館所蔵)

兆晴」で終わっており、彼が死んだのは元年 29 日であることから 71 歳で亡くなる数日前まで働いていたことになる。彼の遺言状には二つの墓所指定があり、一つは当時の習慣通り本居家菩提寺である松阪市新町 874 の樹敬寺に葬られているが、彼の遺言二つ目の指示には図解による独創的な墓設計が残されており、松阪市南方 3 里ほどの山室山の山頂近くの妙楽寺裏山にひっそりと史跡本居宣長墓（山室町高峰 1365）があり、登ること 20 分本居宣長之奥津紀（おづき）と刻まれて彼の希望の設計図通り葬られており、鈴屋遺蹟保存会の国指定史跡の一つである。

## 八、京都医家にみる医の倫理（医の心）

わが国に医学が伝わったのは遣隋使、遣唐使が始まり中国文

化の伝来と共に徐々に中国漢方医学として伝えられた。その後わが国風土にあった漢方医学が広まり江戸時代の医学の中心となつた。以降オランダ医学も導入され明治時代の西洋医学へと推移する。この中で医家の倫理観がいかなる推移を示したかを知ることは極めて有意義なことであろう。

医の倫理は古く紀元前 5 世紀に遡るギリシャ時代の医学の祖ヒポクラテスがその門下に誓わせた「ヒポクラテスの誓い」が最初の医師の倫理規定であり、現在でも広く全世界の医学教育において語り継がれている。この「誓い」は彼の弟子のみならず西洋医学の倫理規定として受け継がれ、さらに江戸時代の蘭方医らによりわが国にも伝えられている。その後の「医の倫理」の推移は、1948 年の世界医師会ジュネーブ宣言、1964 年のヒト

を対象にした医学研究の倫理規定ヘルシンキ宣言と新しい形の倫理原則が全世界で使用されている。医師のバターナリズム的慈善医療は大いに批判され、患者の人権を擁護する医師・患者関係が大きく取り上げられることとなり、生物学的研究（臨床実験）に当たり、目的・方法・予想される利益・危険性を十分に説明して、患者の同意を得るインフォームドコンセント（説明と同意）が必要となったのが新しい医の倫理である。

京都の医家にみられる医の倫理・医の心はいかなるものであろうか。唐時代の宰相陸宣公は「医は以て人を活かす心なり。故に医は仁術という」と印しているが、わが国で最古の医学書『醫心方』（半井家本・東京国立博物館所蔵）でも最初の総論治病大體部の項に丹波康頼は医の倫理なるものを挙げている。私

なりの漢文和訳では「大医ノ病ヲ治スヤ、マサニ神ヲ安ンジ志ヲ定メ、欲スルコト無ク、求ムルコト無ク、先ニ大慈憫隱ノ心ヲ誓願シ、普ク含靈ノ疾ヲ救ワソ、病アリ救イヲ求メテ來レバソノ貴賤・貧富・長幼ヲ問ワズ」と記している。これは正に「ヒポクラテスの誓い」に相当する倫理であり、中国医学にヒポクラテスのギリシャ医学が影響を与えていたのであろうか。丹波康頼は中国六朝、隋・唐時代の医・薬学文献を多く引用していることが知られており、彼の治病大體部がどこから引用されたのか、或いは彼の創作なのか不明である。

江戸時代の曲直瀬道三の書『道三先生切紙』には五十七箇条の医家たるもののがある。このトップに「慈仁」を挙げていることは既に曲直瀬道三の頃で原本コピーと共に述べた。さらに二代目道三（玄朔）は1617年に学寮啓迪院において「啓迪院門下法則」の一つとして医の倫理をまとめ「延寿院医則十七ヶ条」を作成している。順番が一番から二番になつてはいるが、一、宜専慈仁（ヨロシク慈仁ヲ専ラニスベシ）とある。養父曲直瀬道三も二代目道三（玄朔）も共にキリスト教思想の優れた倫理性を知り、特に養父は入信洗礼をも受けていたとフロイスの『日本史』に書かれたほどであり、その思想内容を十分把握しており、慈悲の心、利他の精

神を医則に取り入れて門人に教えていたのであろう。ただ幕府は1614年にキリスト教を禁教としており、高山右近らも国外追放された3年後の医則作成であり、いかに幕府と折り合いをつけたかは議論のあるところで守屋正氏の報告に詳しい考察があり<sup>8)</sup>、狭間芳樹氏もこのことについて触れている<sup>28)</sup>。

曲直瀬玄朔の門人で山脇東洋の養祖父である山脇玄心（1594/97～1678）も医学塾を経営しており、彼の医則「養寿院医則」なるものが代々山脇家に残されている。この医則は「延寿院医則十七ヶ条」と同じ医則で順番だけが異なるものであり、一、慈仁第一之事、をトップに置き、一、平生忠信正直ニシテ邪路ニ趣クベカラズ事を次に置いている。守屋正氏によれば、「養寿院医則十七ヶ条」は「延寿院医則」をもとに作られたものであり、それらの医則を見ると多分にキリスト教思想の影響が認められると指摘している<sup>8)</sup>。二代目道三玄朔が編纂した「延寿院医則」も山脇玄心の「養寿院医則」も当時弾圧されていたキリスト教精神の内容を引き継ぎ、その宗教色を抜いたもので、ギリシャ医学における「ヒポクラテスの誓い」にその源流があると考えられる。

## 九、京都種痘術創始 五十年記念碑

2010年10月にJR山陰本線二

条駅前へ京都府医師会館が移転した。駅ロータリーに面した医師会館の裏側に廻ると中庭駐車場の片隅に消火用配水口、立木と共にボツンと高さ70センチほどの石碑が立っている。この碑が京都でわが国最初の種痘から50年を記念して建立された記念碑である（京都市中京区西ノ京梅尾町3-14）。天然痘（疱瘡）は今や絶滅して人類の歴史に天然痘があったという事実も忘れられかけていたが、2022年5月サル痘のヒト感染が欧米を中心に出出現しわが国にも飛び火し再び関心事となってきている。人と天然痘ウイルスとのつきあいは古く中国では紀元前12世紀、インドでは2000年前から流行し、日本には聖武天皇の天平時代735年頃新羅から漂流民が感染して帰ったとされる。この伝染力の強い天然痘と闘い必死に頑張ったわれわれの先達医家を忍ぶことも現代のSARS（重症急性呼吸器症候群）、MERS（中東呼吸器症候群）や新型コロナウイルス戦争を十分理解することに通じると考えられる。

1796年イギリスのエドワード・ジェンナー（1749～1823）は天然痘に対し牛痘予防接種に成功し、この画期的な発明は広く世界に新たな免疫学的治療法をもたらした。わが国には27年後にシーボルトが牛痘苗を持って来日し、長崎鳴滝塾で接種法を門人の前で供覧したという。これを目撃したことのあるシー



京都種痘術創始五十年記念碑

ボルト門弟が江戸後期の蘭方医 日野鼎哉（1797～1850）で、彼は1833年京都で開業しており、吳秀三氏によれば、京都の日野、大坂の緒方と呼ばれた名医である。1844年頃から数年にわたり蔓延した痘瘡に彼はシーボルト牛痘法導入を企画し、門人の福井藩医笠原良策（1809～1880）と相談して当時有力な名君福井藩主松平春嶽の力を借りて輸入を上申し、蘭方医モニッケがバタヴィアから持ち込んだ天然痘患者の痂皮（カサブタ）の8片を入手し、1849年京都で接種に成功した。この7ヵ月後に鼎哉は54歳で亡くなっている。その墓はわが家の墓所でもある西本願寺大谷本廟（東山区五条橋東）北隣大谷道を登った大きな鳥辺山大谷墓地内にある。

最初の種痘から50年を記念して1898年（明治31）に京都医師有志が大谷墓地で無縁仏とな

っていた鼎哉墓前に残っていた台石の上に記念碑を建立した。その後種痘伝来百年記念の1949年（昭和24）に京都府医師会が鼎哉墓所に新たに墓碑を再建し、50年記念碑は鳥辺山から下ろして府医師会館に移し、医師会館移転と共に市内を二度三度移設されたのが現在の記念碑である。彼に協力して種痘術を京都で定着させた門人笠原良策がいかに苦労をして痘苗を絶やさないよう真冬の豪雪北國街道を京都から郷里福井まで6日間かけて冒険ともいえる行程を苦労して進んだかは私の愛読書の一つである吉村昭氏の小説『雪の花』に詳しい<sup>29)</sup>。笠原良策（白翁）は福井市足羽山と田ノ谷町の2ヵ所の墓に葬られている。京都の種苗は福井だけでなく金沢、名古屋にも、さらに緒方洪庵の要請で大坂除痘館にも分苗されたという。江戸に伝えられ

たのは京都に遅れること9年後の1858年で、伊東玄朴らによりお玉ヶ池種痘所が開設されている。これが東京大学医学部の淵源であり、千代田区岩本町2丁目に記念碑がある。

## 十、木屋町療病院・粟田口療病院・府医学校

京都のど真ん中、河原町御池通を東へホテルオークラ京都（旧京都ホテル・京都市役所前）を過ぎて東山連峰を仰ぎ鴨川へ向かい、御池大橋を渡る手前の北側西詰に「療病院址」と刻まれた石碑が植木の中に立っている。

1872年（明治5）9月からドイツから招聘された医師ヨンケル（Junker von Langegg）がこの地木屋町二条下ル19番の仮設療病院で診察を開始した場所である。これが後の京都府立医科大学へと発展したわけである。病院開設の資金が不足していたため京都の医師で企業家であった明石博高氏（ひろあきら）は京都府に乞われて出資して京都府振興の種々の政策を知事に提言した。京都仏教界特に岡崎願成寺、慈照寺（銀閣寺）、禪林寺（永觀堂）の当時住職3人が発起人となり、市内の著名な寺院だけでなく市中の医師、薬屋の他に花街にも寄付を仰ぎ芸妓・娼婦にも一定の冥加金を課したとされる。この方法で集まった寺院を中心とした府民の熱意による寄付金をもとに府民の力で府民のための療



木屋町療病院址（御池大橋西詰）



栗田口療病院址（青蓮院内）

病院が設立されたわけである。未だに京都府民は京都府立医科大学附属病院を府立病院と呼ぶことで慣れ親しんでいる。木屋町に仮設の療病院は2カ月後には格式ある天台宗門跡寺院（皇族一門が出家し門主となる寺）である栗田口青蓮院の宸殿へと移転され栗田口療病院と名付けられ、明治5年11月1日に開院・開業している。

東山区栗田口三条坊町青蓮院の薬医門を入り突き当たりの右手に府立医科大学八十周年記念（1954年）に建立された「療病院址」の石碑がある。これが私の母校の始まりである。市バス5番 東回りで25分知恩院前下車、東に向か歩くこと7～8分で青蓮院に着く。療病院・府医学校についての歴史は森谷氏の『京医師の歴史』に詳しい<sup>30)</sup>。

ここでの診療・教育は1881年に現在地の上京区河原町広小路

に新築移転されるまで続き、その間3人の外人医師（ドイツ人医師ヨンケル、オランダ人医師マンスフェルト、ドイツ人医師ショイイベ）が招聘され、診療と教育に当たり療病院に近代医学を導き、病院の発展と医学教育に大いに貢献した。杉立氏によれば、当時の政府の方針ではドイツ医学採用が奨励されていたが、幕末から明治にかけて英米医学の優位性も府内で認識されるようになり医師ヨンケルはドイツ人でありながら英語も話せイギリス外科・産科学会会員でもあったことから選ばれたとされる。明治12年4月には医学校が併設されて、大学となる基盤が出来上がった。しかし明治32年京都大学の前身である国立の京都帝国医科大学が設立されると、府立医学校の教授陣の殆どが京都帝国医科大学へと転出して存亡の危機に陥った話は先輩

医家からよく聞かされた歴史である<sup>31)</sup>。このとき府立医学校に残って孤軍奮闘したのが第五代島邨俊一校長であり、初代の京都府立医学専門学校長であったと聞いている。大学の歴史についてはその『京都府立医科大学百年史』に詳しく記載されている<sup>32)</sup>。

#### 参考文献

- 26) Smellie W, A sett of anatomical tables, with explanations, and an abridgment of the practice of midwifery. London, 1754 ([https://www.nlm.nih.gov/exhibition/historicalanatomies/smellie\\_home.html](https://www.nlm.nih.gov/exhibition/historicalanatomies/smellie_home.html))
- 27) 小林秀雄『本居宣長』小林秀雄全集、第14巻、新潮社、東京、2002
- 28) 狹間芳樹『近世日本のキリストン信仰と救贖思想』現代キリスト教思想研究会誌、2009；7：21-36
- 29) 吉村昭『雪の花』新潮文庫、東京、1988
- 30) 森谷魁久『京医師の歴史-日本医学の源流』講談社現代新書、講談社、東京、1978
- 31) 岡田靖雄『島邨俊一小伝-悲運の精神病学者-』日本醫史學雜誌、1992；38（4）：65-98
- 32) 三宅清雄編『京都府立医科大学百年史』発行者佐野豊、文功社、京都、1974

# 石碑を巡る京都医史跡散歩

## —京都医学史とその史跡—

### ⑥ 最終回

廣瀬 源二郎

#### 十一、蘭方医新宮涼庭 と南禅寺順正

新宮涼庭（1787～1854）は京都府下宮津で医家に生まれ、京都市で江戸後期に蘭方医学の診療と教育で活躍した蘭方医である。若くして父親および伯父有馬涼筑から医学を学ぶも飽き足らず、1810年に修業の旅に出て1813年に長崎へ辿り着きカピタンらのオランダ医から蘭学、特にブルハーフェを中心とするライデン医学を学び5年後郷里に戻り、翌1819年に京都で蘭方医として開業した名医である。経済的にも余裕ができたため蘭方医学を教え広める医学校とし

て「順正書院」を南禅寺門前の廢地に建て、古い『傷寒論』と共に蘭学を教え、また西洋のサロン的な雰囲気で蘭学の教育啓蒙に当たったとされる。その母屋・講堂・庭園がそのままの形で南禅寺門前に残され、現在湯豆腐で有名な「南禅寺順正」（左京区南禅寺草川町）となっており、暇があれば訪れたい名所旧跡である。新宮家の墓は南禅寺山門を通った後のすぐ右側の天授庵の墓地にある。

新宮家では涼庭の養子涼民・涼閣・涼介が京都医学研究会から京都府療病院さらに府医学校への設立に貢献しライデン学派の新宮医学の影響を残しており、また新宮本家の涼民の長

男涼亭（横村正直府知事娘婿、1881年東京大学医学部卒）は岡田靖雄氏によれば<sup>31)</sup>、京都府医学校から多くの教授陣が新設の京都帝国医科大学に転出した際に医学校存続のために島邨俊一校長と共に残留奮闘し私の母校に貢献した医家の一人である。彼の旧宅の跡は、中京区室町通夷川上ル東側に数m入る民家の玄関先に「此辺名醫新宮涼亭居住地」の碑が建てられている。杉立義一氏によればこの涼亭居住地とあるのが涼庭の誤りとある。吳秀三氏によれば、新宮涼庭は初め涼亭と書いたとあるが、新宮涼亭は京都で活躍した実在の医家（1889年京都医会報告で上京第五聯合開業医とあ



南禅寺門前「南禅寺順正」



名醫新宮涼亭居住地（中京区室町通夷川上ル）

る) でもあり、果たしてどちらが正しいのであろうか。

京都人ではないが、60歳の晩年から京都に住み、同時代の本居宣長と共に通する国学者でもあり小児科医でもあった『雨月物語』の著者上田秋成(1734~1809)の墓がすぐ近所(南禅寺手前)の浄土宗源智山西福寺(左京区南禅寺草川町82-1)にあり、興味があれば訪れる事ができる。蹴上净水場からインクラインに沿って京都市動物園に向かい南禅寺へ行く橋を渡れば南禅寺参道であり、20数m進むと左側に石碑があり、左折して小路を進めば到着する。

## 十二、醫聖堂 (今熊野觀音寺)

京都で学会期間中にでも暇ができ、京都らしいところを観光も兼ねて散策したいと思ったら訪れたいところは京都駅から近い東山、東大路七条近辺であろう。京都国立博物館、三十三間堂を十分観光して、健脚でもうひと歩きできれば、東大路を南へ下り七条からは泉涌寺通と名前が変わるが是非今熊野觀音寺にある醫聖堂を訪れたい。もちろん近くの総本山泉涌寺も拝観するに値する立派な皇室の菩提寺・御寺であり紅葉の名所もある。歩きたくない人は市バス(泉涌寺あるいは東福寺行市バス202、207か208番)で泉涌寺道下車徒歩10分。東大路を南下

醫聖堂  
(今熊野觀音寺)

醫聖堂 第一次医家先哲碑



し泉涌寺通を左折して数分で泉涌寺山門に至る。大木の連なる莊嚴・嚴肅な街道を進むと左に下りる急な坂道があり、今熊野觀音寺(京都市東山区泉涌寺山内町32)の道標と朱塗りの鳥居橋がある。

今熊野觀音寺は真言宗泉涌寺の塔頭の一つとされる古刹で西国三十三所第15番札所でもあり、その開基は弘法大師とされる。「頭の觀音さん」とも呼ばれ、頭痛や呆け封じの寺としても知られており人気がある。

昭和56年当時の日本医師会長武見太郎氏の発案で日本の医学発展に貢献した医家先哲を祀ると共に、さらなる医道高揚をはかる目的で平安様式の朱塗り二重塔が3年後に寺内裏山に建立された。事業の中心となったのは地元京都医学史研究家の杉立義一氏であり、彼の熱意と全国各界の淨財をもとに完成されたものである。堂の奥隣には奈良・平安時代から幕末にかけての著名な医家122人が醫聖堂・第一次祭祀医家先哲百二十二聖靈位と銘された碑があり、奈良時代

の和氣広世、平安時代の丹波康頼に始まり、この連載で取り上げた栄西、曲直瀬道三、玄朔、名古屋玄医、稻生若水、後藤艮山、香川修庵、賀川玄悦、山脇東洋は全てこの碑に記されている。堂の手前広場には日本医学の源流とされる丹波康頼編纂『醫心方』が出版されて千年を記念した碑もあるが銅板の鏽腐食で読みにくくなっている。これらの事業に尽力された杉立義一氏はその名著である『京の医史跡探訪<sup>2)</sup>』の中で「この地が日本医学の聖地となる事を切望する」と記しておられる。医師たるもの一度は訪ねてみるべき場所であり、ここからは京都市街が遠望できる山上景勝の聖地でもある。

医史跡のみならず千年もの長きにわたり日本の中心として栄えた京都の街自体の歴史を知りたい方には、脇田修・晴子夫妻の共著『物語 京都の歴史』(中公新書)をお勧めしたい<sup>33)</sup>。

## あとがき

日本医史学会会員でもなく、

漢方の知識も全くない私が京都の医史跡を訪ねてみたいと思った動機は、親友である岩田誠先生（東京女子医科大学名誉教授）から数年前に内科学会総会懇親会の席上で、京都の古い医家の歴史でも書きませんかと誘われたことが端緒である。その頃は金沢と京都を毎月往復して数日を京都で暮らし始めており、のんびりと自宅のある下鴨近辺を何の当てもなく散策していた。しかし2年3年と過ぎると、やはり目的をもって行動する方が老化防止（抜け予防）には良いと確信するようになり、家の蔵書の中から以前に買ったまま読んでいなかった書籍を取り出して読むようになり、京都の医学史でも探ってみようと考えるに至ったわけである。冒頭にも挙げた京都府医師会編の『京都の医学史』<sup>1)</sup>、杉立義一氏著『京の医史跡探訪』<sup>2)</sup>を読んでみるとその個々の医家に関する内容は歴史学的に徹底的に資料検索されており、何ら加えることはなさそうであった。まあ自分の小さな知識のまとめのためにと思つて綴ったのが本稿である。両書とも現在絶版となり、特に前者は大冊二巻からなり本文篇は1500頁、幅8センチの厚さで重量もあり通読することは殆ど不可能であり、後者もまた著者が亡くなられており、増補版が出版された平成3年（1991）から30年以上経過しており、墓所・墓石がその後どのように変わつ



ているかを散策して見てみようと思った次第である。

30余年の経過は相当長く、小さな個人の寺などは荒寺となり、墓守する子孫もなく、墓碑銘も風化により読み取れない墓石、既に無縁仏の中に放置された墓もあり、また記念碑の説明文などは雨に曝された結果殆ど解読できない状態も多くあり、中には日本医史学会の支援で新たに整備された史跡も稀には見られるがごく少数であり、今後いかにしてかかる医史跡を保存するかをわれわれ医師と地域の行政とが協力して考える必要性を感じているところである。

参考文献は自分なりにできる限り広く集め、熟読して書き上げたつもりであるが、医史学の専門家ではないことから誤りがあればお許しいただきたい。参考文献に挙げた著者の皆様、特に『京都の医学史』編纂に携われた故杉立義一氏を含む京都府医師会医学史編纂室および京都医学史研究会の諸氏には深甚の敬意とお礼を申し上げたい。ま

た京都の自宅から徒歩5分にある京都府立京都学・歴彩館（旧京都府立総合資料館）でもいろいろお世話になったことを書き留め、日本における医史学創始者である富士川游氏の名著『日本醫學史 決定版』<sup>34)</sup>およびその縮刷版『日本医学史綱要1・2』<sup>35)</sup>には殆ど全ての項目で参考にさせていただいたことを附記したい。最後に本稿を掲載する機会を与えて頂いた『大塚葉報』編集長松山真理さん、また編集担当として多くのご助言を頂いた岸本早苗さん、京都市街地案内につきあってくれた家族に感謝します。

令和5年8月11日、齢84歳誕生日に修正脱稿す

京都市左京区下鴨北園町にて  
著者

#### 参考文献

- 33) 脇田修・脇田晴子『物語 京都の歴史－花の都の二千年』中公新書、東京、2008
- 34) 富士川游「日本醫學史 決定版」日新書院、京都、1941
- 35) 富士川游、小川鼎三校注『日本医学史綱要1・2』全二冊、平凡社、東京、2011